

研究所報

No.64

2014. 6. 1.

目次

真宗総合研究所の課題	1
2014(平成26)年度「特定・指定研究」等研究組織一覧	2
2014(平成26)年度「特定・指定研究」等研究目的紹介	4
2014(平成26)年度「一般研究」研究組織一覧	9
2014(平成26)年度「一般研究」(追加/「科研究」含)研究目的紹介	12
海外学会報告	29
海外研究調査報告	32
学術交流協定に基づく共同研究	34
国内学会報告	37
公開研究会(講演会)・共同研究会報告	38
大谷大学史資料室活動報告	46
2013年度「特定・指定研究」研究成果報告会について	47
特別研究員研究成果報告	49
彙報	56

真宗総合研究所の課題

研究・国際交流担当副学長・教授 松川 節
真宗総合研究所長

大谷大学真宗総合研究所は、真宗・仏教の立場から諸学問を統合することと、仏教を通じた国際的な学術交流を推進することを使命とし、1981年の開所以来、今年で33年目を迎える。その研究活動は多岐にわたるが、中心となるのは大学が主体となって推進するプロジェクトであり、今年度は、特定研究「教如上人史料の調査と研究」と指定研究「清沢満之研究」がそれぞれ三年計画で新たにスタートした。また、継続中のプロジェクトとして、指定研究「国際仏教研究」、指定研究「西藏文献研究」があり、学内外の研究者による共同研究、国際学会の組織運営と参加・報告、学術交流協定締結に基づく海外の研究機関との共同研究や公開講演会の開催、客員研究員制度により海外の研究者を迎える学術交流など、多彩な活動を行っている。

一方、研究所直轄のプロジェクトとして、大谷大学史資料室、東本願寺海外布教資料室、デジタル・アーカイブ資料室を置き、関係資料の継続的収集・整理を進めている。

さらに、本研究所における独創的な研究プロジェクトとして「一般研究」がある。今年度は、科学研究費助成事業に採択された24件、次年度以降の科学研究費助成事業申請のための予備研究1件、そして個人研究の本研究1件、計26件もの研究プロジェクトが推進されている。

それぞれの研究班には本学教員のほか、嘱託研究員・協同研究員として国内外の研究者が参加しており、また研究補助員として本学大学院博士後期課程の学生が加わっている。総体として、本学教員のうち37名が関わり、学外の研究者としては、本学名誉教授を含んで58名が参画している。

研究所には研究班ごとにデスク、書架、ロッカー、パソコンが設置され、大学図書館・大学ネットワークの利用、ミーティングルームを利用した研究会の開催など、研究環境は十分に整備されている。また、研究成果公表のために毎年一冊『真宗総合研究所研究紀要』を刊行しており、最新号(31号;2014年3月発行)には、指定研究より4本、一般研究より14本の研究成果が掲載された。同様に、研究活動を周知する目的で、年二回『研究所報』を刊行している。

課題

このように本研究所は開所以来、不断に研究活動を積み重ねており、一定の研究成果を世に送り出している一方、様々な課題を抱えていることも事実である。2014年4月に私が所長に就任してから二か月

のあいだに、2つの大きな課題が新たに浮上した。

一つは、研究倫理にかかわる問題である。この件については、すでに『真宗総合研究所研究紀要』31号において、「訂正とおわび」という形で経緯と謝罪文を掲載してあるので、ここでは繰り返さないが、研究倫理を遵守した適正な研究活動を推進すべく、今後は本学の「研究倫理規程」「研究活動における不正行為への対応に関する規程」の周知徹底をはかっていきたい。

もう一つは、本研究所が外部から借用している資料の取り扱いをめぐる問題である。貴重な資料を寄託されている以上、「善良」な管理者としての注意義務が求められることは言を俟たないが、実際的な管理・運営について所内の合意形成がはかられていないという課題が浮上している。この件については、研究所に関わる資料(一次資料のみならず二次資料も含む)全般について、管理運用規程を整備して対応していきたい。

これら以外にも課題は多い。第一に、情報発信力の問題がある。現在、研究所のWEBサイトは大学WEBサイトに組み込まれているが、5月20日現在、今年度(2014年度)の研究組織についてアップデートがなされていない。また、研究所WEBサイトからリンクする方たちで、2つの指定研究班の独自サイトが存在しているが、最終更新は2008年と2010年のままであった。ただし、この課題解決に向けては本稿執筆中に明るいニュースが寄せられた。本年5月28日付けで「西藏文献研究」班の独自サイトが更新されたのである(<http://web1.otani.ac.jp/cr/twrpw/>)。また、研究所自体の情報発信については、Facebookページを開設し、国内に止まらず、世界に向けて研究所の活動を紹介していきたいと考えている。

第二に、多種多様な研究班が活動している結果、成果公表媒体の『研究紀要』に多くの研究報告が寄せられ、編集・査読体制がそれに追いついていないことがあげられる。これについては当たり前のことであるが、まずは投稿締め切りを厳守していただき、その上で十分な査読期間を設け、余裕を持って編集にのぞみたい。この点でご協力をお願いしたい。

これらの課題を解決していくために、研究所における風通しのよい研究環境の構築を目指して、新たに「意見箱」を設置し、関係者からの意見を求めることとした。また、本年7月には研究者総会を開催して、意見を集約する場としていく所存である。

2014(平成26)年度「特定・指定研究」等研究組織一覽

【特定研究】

(2014.4.1付)

研究名	研究課題及び研究組織
教如上人研究	研究課題 真宗大谷派・東本願寺開祖である教如上人に関わる史料の調査と研究 研究代表者 草野 顕 之 (学長・教授・日本仏教史学) 研究員 福島 栄 寿 (チーフ・准教授・近代仏教史・日本思想史) 平野 寿 則 (准教授・日本近世史・近世仏教史・真宗史) 川端 泰 幸 (任期制講師・日本中世史) 嘱託研究員 大 桑 斉 (本学名誉教授)

【指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織
清沢満之研究	研究課題 清沢満之の生涯と思想の研究を更に進め、その成果を『清沢満之全集』の補遺として、発刊する。 研究代表者 藤原 正 寿 研究員 藤原 正 寿 (准教授・真宗学) 一 柴 真 (教授・真宗学) 福島 栄 寿 (准教授・近代仏教史・日本思想史) 西本 祐 攝 (講師・真宗学) 嘱託研究員 安富 信 哉 (本学名誉教授) 村山 保 史 (教授・西洋哲学・日本哲学) 名畑 直日児 (真宗大谷派教学研究所研究員) 研究補助員 (RA) 村上 良 顕 (博士後期課程第2学年) (RA) 石原 樹 (博士後期課程第1学年)
国際仏教研究	研究課題 諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開 研究代表者 井上 尚 実 研究員 井上 尚 実 (准教授・真宗学) Robert F. Rhodes (教授・仏教学) 新田 智 通 (講師・仏教学) 藤 枝 真 (准教授・宗教学・哲学) 松浦 典 弘 (准教授・東洋史学) 浅見 直一郎 (教授・東洋史学) 織田 顕 祐 (教授・仏教学) 箕浦 暁 雄 (准教授・仏教学・人文情報学) 嘱託研究員 James C. Dobbins (オーバーリン大学教授) Mark L. Blum (カリフォルニア大学バークレー校教授) Paul Watt (早稲田大学留学センター教授) 羽田 信 生 (毎田周一センター所長) 阿満 道 尋 (アラスカ州立大学アンカレッジ校准教授) Michael J. Conway (本学非常勤講師) Michael Pye (マールブルク大学名誉教授) 桃木 至 朗 (大阪大学教授) 大西 和 彦 (本学客員研究員・ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院客員研究員) 福島 重 (本学非常勤講師) 研究補助員 (RA) 梶 哲 也 (博士後期課程第1学年) (RA) 林 研 (博士後期課程第3学年) (RA) 尾崎 俊 文 (博士後期課程第3学年)

研究名	研究課題及び研究組織	
西藏文献研究	研究課題	チベット語文献及びバリー語写本のデータベース化
	研究代表者	福田 洋一
	研究員	福田 洋一 (教授・仏教学) 武田 和哉 (准教授・歴史学・考古学・人文情報学)
	嘱託研究員	白館 戒雲 (本学名誉教授・特別研究員) デルゲルジャルガル (モンゴル国立大学社会科学部歴史学科長・准教授) 清水 洋平 (本学非常勤講師・特別研究員) 石田 尚敬 (東京大学大学院人文社会系研究科特任研究員) 高本 康子 (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター学術研究員) 西沢 史仁 (東京大学大学院人文社会系研究科研究員) 伴 真一朗 (博士後期課程修了) 舟橋 智哉 (博士後期課程修了)
	研究補助員 (RA)	渡邊 温子 (博士後期課程第3学年)
	(RA)	LAMAO ZHUOMA (博士後期課程第2学年) (拉毛卓瑪)

【資料室】

名称	研究課題及び研究組織	
大谷大学史資料室	研究課題	大学史関係資料の収集・整理
	室長	藤田 義孝 (研究所主事・准教授・フランス文学)
	嘱託研究員	戸次 顕彰 (本学非常勤講師)
	研究補助員 (RA)	松岡 智美 (博士後期課程第3学年)
東本願寺海外布教資料室	研究課題	大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の整理
	室長	桂 華淳祥 (教授・東洋史学)
	嘱託研究員	長谷川 雄高 (博士後期課程修了)
	研究補助員 (RA)	濱野 亮介 (博士後期課程第3学年)
デジタル・アーカイブ資料室	研究課題	大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築
	室長	藤田 義孝 (研究所主事・准教授・フランス文学)

2014(平成26)年度「特定・指定研究」等研究目的紹介

教如上人研究

真宗大谷派・東本願寺開祖である 教如上人に関わる史料の調査と研究

チーフ・准教授 福島 栄寿
(近代仏教史・日本思想史)

本指定研究の研究課題は、「真宗大谷派・東本願寺開祖である教如上人に関わる史料の調査と研究」である。

本研究の意義と目的についてであるが、まずもって、真宗大谷派・東本願寺開祖の位置にある教如上人(永禄元年[1558]～慶長19年[1614])の研究は、「大谷派なる精神」、大谷派存立の理念と存在理由を明らかにする意義を有している。こうした意義を持つ本研究であるが、具体的には、教如上人に関する史料の全面的・組織的な調査を実施し、それらを体系的に整理して、将来的には出版・公刊し、広く内外に成果を問うことを目的としたい。

折しも2013年(平成25)は、教如上人の四百回忌が真宗本廟および各地で執行され、教如上人に対する関心が高まっている。また、そのなかで、教如上人に関する新史料の発見も相次いでおり、調査研究の好機であると考えられる。真宗史研究の領域でも、『教如と東西本願寺』(同朋大学仏教文化研究所編 2013年)などの研究成果が公刊され、教如上人研究の重要性が学界においても再認識されつつある。このように教如上人研究への関心が高まっている機会を捉え、教如上人に関わる史料の収集・調査・研究を行うことを本研究の目的とするものである。

次に、本研究の研究計画と方法についてであるが、本研究の中心は、教如上人に関する史料の調査を行うことである。具体的には、教如上人の生涯を明らかにする伝記史料、その理念に関わる教学的史料、東本願寺別立・教団形成過程を解明する史料など、教如上人に関わる全史料を調査対象とする。具体的には、1. 教如上人授与物(本尊・名号・開山御影以下の五尊、寿像など)、2. 消息・書状、3. 聖教文言掛幅、4. 開板関係史料(正信偈三帖和讃・御文など)、5. 言行を伝える覚書・日記類などが、その調査対象となる。

これら一次史料の他に、後世の伝記史料のような二

次史料も調査対象に含まれるが、まずは、上記1～5の一次史料を対象として、史料所在データベースを作成することから着手し、それと並行して調査・研究を進めていくこととしたい。

以上のような調査・研究を踏まえ、従来の教如上人研究でも未解明であった課題について、研究班での共同研究を通じて、明らかにしていくことができれば、と考えている。

清沢満之研究

清沢満之の生涯と思想の研究を 更に進め、その成果を『清沢満之 全集』の補遺として、発刊する

研究代表者・准教授 藤原 正寿
(真宗学)

本研究は、本学・学祖である清沢満之の生涯と思想に関する研究調査を行い、その成果をすでに刊行されている『清沢満之全集』(岩波書店)を補完する史料として公にすることを目的とするものである。2002年の清沢満之100回忌にあわせて刊行されたこの『全集』は、清沢満之個人についての研究のみならず日本の近代の思想研究なканずく、仏教研究に資する成果であった。

清沢満之の全集については、本研究所での研究成果であるこの全集以前にも幾度か編纂されており、とくに西村見暁らによって編纂された『清沢満之全集』(法蔵館、1953～1956)は先行する全集として優れた業績であった。特に第一・三・五・八巻に収められている清沢満之に関する追憶・資料編は、本研究所の全集には収録されておらず、現在でも清沢満之の研究者にとっては貴重な資料となっている。しかしこの全集は現在絶版状況にあり、入手が困難になっている。そこで本研究では、この法蔵館発行の『全集』第一・三・五・八巻を基礎資料として、さらに清沢満之に関わるさまざまな周辺資料を再調査し、整理収集を行っていく。また、『全集』(岩波書店)発刊以降に確認された清沢満之自身に関する資料(すでに数点の資料が確認されている)を調査収集し、公にしていこうとも目的としている。

今年度は、まず『清沢満之全集』刊行時の研究資料、記録等を精査し、どのような課題が残されているのかを再検討する。そして、今回更に調査すべき内容を抽出し、資料を渉猟する事から始める予定である。具体的には、『全集』発刊以後存在が確認された資料を収集分析し、掲載の有無を確定する。

研究作業に当たっては、体制を大きく二つに分け、主として真宗大谷派教学研究研究所発行の『関根仁応日誌』の史料調査の過程で存在が確認された長徳寺(新潟)に所蔵される清沢満之の講義録、清沢満之直筆書簡の収集・整理、及び翻刻作業を行っていく班と、清沢満之に関するさらなる史料の収集・整理・調査を行う班で作業を行っていく。

これまで真宗総合研究所においてなされてきた清沢満之に関するさまざまな研究の成果を継承しながら、未だ全集等に掲載されていない貴重な史料の渉猟整理およびデジタル化されたデータベースの構築と、史料の翻刻を中心に今年度の作業を進め、清沢満之に関する研究の基礎資料を提示していくことが出来るようにしていきたいと考えている。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・准教授 井上 尚実
(真宗学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。近年、仏教学・宗教学の分野における国際化は以前にも増して急速に進んでおり、真宗についても外国語による研究を視野に入れなければならない状況にある。従来、大きく三つの言語文化圏に分かれて、英米班、ドイツ・フランス班、東アジア班の体制で進められてきたが、今年度からベトナム班を加えた四班となり、それぞれ下記のような研究テーマで活動する。

〈研究テーマ〉

①英米班：真宗を中心とした仏教研究動向を把握し、真宗関連資料の翻訳出版、欧米の研究者・研究機関との共同研究を立案・推進する。

- ②ドイツ・フランス班：プロテスタント神学との対話研究、および翻訳出版を行う(ドイツ)。
近代化と宗教：主に浄土真宗の社会学的観点からの研究、および翻訳出版を行う(フランス)。
- ③東アジア班：中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究を行う。
- ④ベトナム班：ベトナム社会科学院宗教研究院との共同プロジェクト推進の準備を行う。

〈活動内容〉

英米班

①真宗・仏教関係の国際学会大会参加

第17回国際仏教学会(IABS)大会(2014年8月18日～23日、オーストリア、ウィーン大学)において研究員が発表を行う。第14回ヨーロッパ日本研究協会(EAJS)国際会議(8月27日～30日、スロヴェニア、リュブリャナ大学)の宗教部会において、*Images of Shinran in Twentieth Century Japan: Perspectives from Inside and Outside the Shin Denomination* (20世紀における親鸞像：真宗教団の内側と外側からの視座)というテーマでパネル発表を行う(阿満道尋囑託研究員、井上尚実研究員、マイケル・コンウェイ囑託研究員、ロバート・F・ローズ研究員)。

②真宗関係の翻訳研究

阿満道尋囑託研究員を中心に、真宗大谷派北米開教区真宗センターから出版予定の教師課程教科書『浄土の真宗』『宗門の歩み』の英訳について、英訳チェックと編集校正に協力する。また、英米班として次に取り組むべき中長期的翻訳研究の真宗関係テキストの選定を進める。

③真宗近代教学アンソロジー *Cultivating Spirituality* (SUNY, 2011) 出版記念シンポジウムの準備

2015年6月26日(金)・27日(土)の2日間、大谷大学で開催する予定の *Cultivating Spirituality* 出版を記念したシンポジウムの準備を進める。

④公開講演会の開催

国内外で活躍している仏教学・真宗学関係の研究者を招聘し、公開講演会を3～4回程度開催する。第1回は、6月末にペンシルバニア大学のジャスティン・マクダニエル准教授による“*Buddhist Manuscript Culture in Southeast Asia*”(東南アジアの仏教写本文化)をテーマとする講演を予定している。

⑤真宗・仏教関係の欧文書籍・研究論文の書誌データ収集と整理

電子ジャーナル掲載論文を含めた欧文の仏教学・真宗学関係の近刊データを集めて整理し、公開できる

ように準備する。

ドイツ・フランス班

①翻訳

マールブルク大学神学部ディートリッヒ・コルシユ教授の著書 *Martin Luther: Eine Einführung, Zweite Auflage* (『マルティン・ルター入門』第2版) の翻訳がいったん完了している。訳文の検討が終了次第、出版を計画している。

②シンポジウムの論文化 (刊行準備)

2010年にフランス国立高等研究院においておこなわれたシンポジウム「フランスと日本におけるナショナル・アイデンティティと宗教」で口頭発表した原稿を加筆修正し、論文化(英語・フランス語)したものを同研究院のフィリップ・ポルティエ教授に送り、フランスでの刊行の準備が進んでいる。2014年度にフランスの出版社から出版されることが決定している。

③学会参加の準備

2015年8月にドイツ・エアフルト大学で開催される、第21回国際宗教学・宗教史学会 (IAHR) 大会への参加準備をする。パネルや個人発表のための準備会議を予定している。

東アジア班

中国社会科学院歴史研究所との協定に基づく学術交流

本年度も本学から2名を派遣、先方から2名を招聘し、それぞれ公開研究会を開催する予定である。協定は5年を期限として締結されており、本年度は最終年度にあたる。延長される見込みであるが、将来的に国際シンポジウムや報告書の出版といった成果につなげることができるよう準備を進めていく。

ベトナム班

ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院(以下、宗教研究院)との越日仏教用語事典の共同編纂に先立って、ベトナム側と日本側が互いの国の仏教史に理解を深めることで、共同研究ならびに学術交流の基盤を形成することが必要である。そのため、宗教研究院との交流協力に関する覚書に基づき、2014年度の1年間をかけて宗教研究院はベトナム仏教略史を編纂し、国際研ベトナム班は日本仏教略史を編纂して、それぞれ越日・日越翻訳版を作成する計画である。

西藏文献研究

チベット語文献及びパーリ語 貝葉写本のデータベース化

研究代表者・教授 福田 洋一
(仏教学)

本研究は、大谷大学所蔵のチベット語文献、タイ王室寄贈の多数のパーリ語貝葉写本について

- (1)専門の研究者が十分に活用できるよう整理し、データベース化すること
- (2)重要・貴重と思われるものについては電子テキスト化・デジタル画像化して公開することを目的とし、2014年度に以下の研究を行う。

1. チベット語文献の電子テキスト化

- (1)ツァンナクパ(12世紀)『量決訳注』(Otani No. 13971)
同書のテキスト校訂、科段の作成、ダルマキールティ『量決訳』の引用箇所を明示などを織り込んだ電子テキストのうち、今年度は第三章(最終章)を公開する。また解読研究に着手し、訳注を作成する。
- (2)リンチェンジョルデン(1550-1630頃)『サンプ明鏡史』(Otani No. 13981)

これまで本研究で取り組んできたサンプ寺史の稀覯書『サンプ明鏡史』の解読作業に基づき、同書の研究、校訂テキスト、訳注、索引を、写本のカラー写真とともに刊行する。

- (3)ブムタクスムバ『俱舍論語義解明・善説の陽光』(Otani No. 13972)

昨年度電子テキスト入力終了した同書について公開に向けた加工を施して公開する。

- (4)シェーラブジンバ『中観学説決訳集』(Otani Nos. 13949~13954)

17世紀後半のニマタン学堂長シェーラブジンバ作の中観論書六冊の総称。これらはゲルク派の開祖ツォンカパの『入中論注』に見られる中観学説の主要テーマについて諸説を比較検討したものである。本年度から入力を開始する。

2. 大谷大学所蔵チベット語文献のデジタル化

北京版チベット大蔵経のうちテンギユルの撮影を再開する。またこれまで撮影された画像データについて

は、公開できるよう加工作業を行う。

3. モンゴル国立大学との共同研究「モンゴルにおける仏教の後期発展期（13世紀～17世紀）の仏教寺院の考古学・歴史学的研究」

モンゴル国立大学との学術交流協定に基づく共同研究を継続する。2014年4月25日～5月2日にヘンティ県とセレンゲ県におけるモンゴル寺院の調査を実施する。

4. パーリ語貝葉写本のデジタル化

大谷大学所蔵パーリ語貝葉写本のうち稀観本の抽出作業とその写真撮影およびローマ字転写化を進める。また大谷大学所蔵パーリ語貝葉写本と関係するタイおよび欧米の写本の比較調査を実施する。

5. 寺本婉雅の日記の翻刻

村岡家所蔵寺本婉雅関連資料に含まれる未公開の日記のうち、1901年11月27日～1902年8月26日の部分の翻刻を進める。

6. 海外の研究者、研究機関との交流

随時、海外のチベット学研究者による公開研究会を開催する。

大谷大学史資料室

大学史関係資料の収集・整理

室長・准教授 藤田 義孝
(フランス文学)

本資料室の任務は、大谷大学の歴史に関わる様々な資料を収集・整理し、適切な保管の方策を講じた上で、それらを広く公開し活用できるようにすることである。今年度も、武田武麿先生（元本学教授）から寄贈された資料など、未だ十分に整理できていない所蔵資料の分類整理を継続的に進めながら、図書館1階エントランスに借り受けることのできた展示ケースを活用し、年2～3回のスポット展示によって所蔵資料の公開・展示を行う。

また、旧「近代史研究班」が西方寺等で撮影したフィルムや旧「学事史研究班」の撮影フィルムのデジタル

データ化を完了したので、その目録作成と、当資料室所蔵の未整理フィルム資料のデジタルデータ化を並行して進めていく。

さらに、今年度も引き続き全国大学史資料協議会の研究会（西日本部会）に参加し、他校のアイデアやノウハウを持ち帰って、本学における大学史関係資料の保存・公開方法の改善に役立てる予定である。

なお、本学開校当時の本館と現在の尋源館の両方を既に3Dデータとして作成済みなので、これらを模型やペーパークラフト等の形で公開することで、広く学内外に本学の歴史への興味をかき立てることも目指していきたい。

東本願寺海外布教資料室

大谷大大学所蔵 「東本願寺旧蔵資料」 海外布教関係部分の整理

室長・教授 桂華 淳祥
(東洋史学)

大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」に含まれる海外布教関係部分は、おもに20世紀前半における東本願寺の海外布教に関する公文書の綴りで、当時の海外布教の実態を伝える貴重な資料である。しかしそれは事務書類綴りとして未整理の状態に残されているもので、その内容はもとより点数すら正確には把握されていない。したがってこの状態が続けばその存在も知られず、あるいは散逸の恐れもある。

本資料室の目的は、これら未整理の資料を整理して「資料一覧」を作成するとともに、資料自体を適正な形態にまとめて保存することにある。これによって本資料の半永久的な保存が可能になるとともに、今後、当該時代の東本願寺の活動をはじめとする様々な研究に寄与することが期待される。ここに本資料を整理する意義がある。

資料には仮番号を付しており、合計165点ある。2013年度現在での作業は80番台後半に入っており、本年度はそれを続行する。また北南米地域の資料も収録される50番台にも着手する。具体的な方法は下記の通りであるが、史料の性質上、(a)真宗総合研究所と(b)図書館・博物館事務室との2カ所において行う。

- ①事務書類綴りの状態になっている資料についてその内容を確認し、必要事項を記録する(b)。
- ②記録された必要事項を精査しつつ「資料一覧」を作成する。また精査に必要な情報を得るため、当該期東本願寺発行の機関誌『宗報』などによって、人事異動・布教所開設などに関する記事を整理しており、現在明治4～38年発行分までの作業が終了しているので、この作業を継続する(a)。
- ③作成された「史料一覧(原案)」と対比し、内容を確認した資料を適正な形態にまとめて保存可能な状態にする(b)。

なお2012年度より、将来、他の機関との情報共有をする場合、それをより円滑にするための準備として、従来の「資料一覧」から新しい体裁の「資料一覧」へのデータ移行作業を始めており、概ね最終段階に来ているので、これを完成させる(a)。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料の デジタル・アーカイブ構築

室長・准教授 藤田 義孝
(フランス文学)

本学に所蔵された多くの貴重な文献資料を半永久的に保存し活用していくため、資料をデジタル・データ化し、分類整理・保存する作業を継続的に行う。その一環として、2010年度より本学図書館所蔵古典籍を書誌データベースとして登録する作業を続けており、今年度も引き続きデジタル・アーカイブ化を進めていく。ただし、作業の完了までには、なお歳月を要すると見込まれる。

また、旧データベース研究班が横山写真館から借り受けた資料の目録作成が未だ完了していないため、今年度中に目録を完成し、その後に資料の返還や保管など、しかるべき措置を取る予定である。

2014(平成26)年度「一般研究」研究組織一覧

【共同研究】

(2014.4.1付)

研究名等	研究課題及び研究組織	
【2012～2014年度「科研費」採択】 一般研究(松川班)	研究課題 研究代表者 研究員 協同研究員 研究協力員(支援)	新出土仏教遺物と文献史料の統合による13～17世紀北アジア史の再構築 松川 節 松川 節(教授・モンゴル学) 三宅 伸一郎(准教授・チベット学) 清水 奈都紀(奈良大学非常勤講師) 伴 真一朗(博士後期課程修了)
【2014～2016年度「科研費」採択】 一般研究(松川班)	研究課題 研究代表者 研究員 協同研究員	モンゴル国カラコルム博物館における歴史研究を基軸とした情報化と国際協働の推進 松川 節 松川 節(教授・モンゴル学) 清水 奈都紀(奈良大学非常勤講師) 二神 葉子(国立文化財機構東京文化財研究所情報システム研究室長)
【2013～2015年度「科研費」採択】 一般研究(武田班)	研究課題 研究代表者 研究員 協同研究員	デジタルアーカイブ技術による契丹国の歴史考古言語資料の復元的研究と集成 武田 和哉 武田 和哉(准教授・歴史学・考古学・人文情報学) 松川 節(教授・モンゴル学) 町田 吉隆(神戸市立工業高等専門学校教授) 等々力 政彦(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター客員教授) 高橋 学而(福岡文化学園博多女子高等学校教諭) 武内 康則(京都大学白眉センター助教) 藤原 崇人(関西大学東西学術研究所非常勤研究員) 橋堂 晃一(龍谷大学・奈良大学非常勤講師) 福井 敏(本学非常勤講師)
【2014～2017年度「科研費」採択】 一般研究(武田班)	研究課題 研究代表者 研究員 協同研究員	アブラナ科植物の伝播・栽培・食文化史に関する領域融合的研究 武田 和哉 武田 和哉(准教授・歴史学・考古学・人文情報学) 三宅 伸一郎(准教授・チベット学) 渡辺 正夫(東北大学大学院生命科学研究所教授) 鳥山 鉄哉(東北大学大学院農学研究科教授) 吉川 真司(京都大学大学院文学研究科教授) 横内 裕人(京都府立大学文学部准教授) 江川 式部(明治大学商学部兼任講師) 等々力 政彦(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター客員教授)
【2013～2015年度「科研費」採択】 一般研究(村山班)	研究課題 研究代表者 研究員 協同研究員	日本における西洋哲学の初期受容ーフェノロサの東大時代未公開講義録の翻刻・翻訳ー 村山 保史 村山 保史(教授・西洋哲学・日本哲学) 朴 一功(教授・西洋古代哲学) 渡辺 啓真(教授・倫理学) 池上 哲司(本学名誉教授) 藤田 正勝(京都大学大学院教授) 竹花 洋佑(本学非常勤講師・特別研究員) 西尾 浩二(本学非常勤講師) Michael J. Conway(本学非常勤講師)

研究名等	研究課題及び研究組織
[2013~2016年度「科研費」採択] 一般研究(小谷班)	研究課題 スティラマティの俱舎論注釈書『真実義』梵文写本第一章の研究 研究代表者 小谷 信千代 研究員 小谷 信千代(本学名誉教授・特別研究員) 協同研究員 秋本 勝(京都女子大学教授) 福田 琢(同朋大学教授) 本庄 良文(佛教大学教授) 松田 和信(佛教大学教授) 加納 和雄(高野山大学准教授) 箕浦 暁雄(准教授・仏教学・人文情報学) 上野 牧生(短期大学部助教・仏教学) 松下 俊英(本学非常勤講師・特別研究員)
[2014~2018年度「科研費」採択] 一般研究(柴田班)	研究課題 紋章との比較による系譜の図像化規則とその構造分析 研究代表者 柴田 みゆき 研究員 柴田 みゆき(准教授・情報処理学) 三浦 誉史加(准教授・英文学・英米文化) 協同研究員 松浦 亨(北海道大学病院企画マネジメント部准教授) 杉山 正治(立命館大学総合科学技術研究機構客員研究員) 生田 敦司(本学非常勤講師) 清水 利明(一般財団法人比較法研究センター特別研究員) 横澤 大典(本学非常勤講師) 平塚 聡(立命館大学情報理工学部知能情報学科研修生) 齋藤 晋(国土利用再編研究所副理事長)

【個人研究】

研究名等	研究課題及び研究組織
[2011~2014年度「科研費」採択] 一般研究(ダシユ班)	研究課題 日本で発見されたオリヤー語「マハーバーラタ」「津島貝葉」の校訂テキスト作成 研究代表者 Dash Shobha Rani(准教授・インド学・仏教学)
[2011~2014年度「科研費」採択] 一般研究(井黒班)	研究課題 清代生態環境档案を用いた西北開発における環境認識と技術的対応に関する研究 研究代表者 井黒 忍(講師・東洋史学)
[2012~2014年度「科研費」採択] 一般研究(脇中班)	研究課題 触法知的障害者の更生と地域生活定着を促進するピアサポートプログラムの開発と評価 研究代表者 脇中 洋(教授・発達心理学・法心理学)
[2012~2014年度「科研費」採択] 一般研究(河崎班)	研究課題 バガヴァティー・アラーダナーの新校訂本作成と全訳によるジャイナ教の断食死研究 研究代表者 河崎 豊(本学非常勤講師・特別研究員)
[2012~2014年度「科研費」採択] 一般研究(清水班)	研究課題 タイ国を中心とする東南アジア撰述仏教説話写本の研究 研究代表者 清水 洋平(本学非常勤講師・特別研究員)
[2012~2014年度「科研費」採択] 一般研究(竹花班)	研究課題 後期田辺哲学における象徴概念の研究 研究代表者 竹花 洋佑(本学非常勤講師・特別研究員)
[2013~2014年度「科研費」採択] 一般研究(古荘班)	研究課題 「宗教間体験の現象学」構築のための基礎的研究 研究代表者 古荘 匡義(任期制助教・特別研究員)
[2013~2014年度「科研費」採択] 一般研究(木島班)	研究課題 デイケンズと絵画 研究代表者 木島 菜菜子(任期制助教・特別研究員)
[2013~2015年度「科研費」採択] 一般研究(赤枝班)	研究課題 グローバル化時代における「人権」概念とセクシュアル・マイノリティの包摂 研究代表者 赤枝 香奈子(任期制講師・社会学)
[2013~2015年度「科研費」採択] 一般研究(高橋班)	研究課題 共感覚の進化的基盤を探る 研究代表者 高橋 真(講師・比較認知科学)
[2013~2015年度「科研費」採択] 一般研究(白館班)	研究課題 インド・チベットにおける般若学の研究 研究代表者 白館 戒雲(本学名誉教授・特別研究員)
[2013~2015年度「科研費」採択] 一般研究(松下班)	研究課題 『中辺分別論』の未解読チベット語註釈写本の研究 研究代表者 松下 俊英(本学非常勤講師・特別研究員)
[2014~2016年度「科研費」採択] 一般研究(福田班)	研究課題 初期チベット論理学成立史解明のための基礎研究 研究代表者 福田 洋一(教授・仏教学)

研究名等	研究課題及び研究組織	
【2014～2016年度「科研費」採択】 一般研究（阿部班）	研究課題 研究代表者	移行期正義の社会的影響に関する比較社会学的研究 阿部利洋（准教授・社会学）
【2014～2016年度「科研費」採択】 一般研究（黒澤班）	研究課題 研究代表者	保育カンファレンスが保育者の「同僚性」に与える効果の縦断的追跡研究 黒澤祐介（本学非常勤講師・特別研究員）
【2014～2016年度「科研費」採択】 一般研究（鈴木班）	研究課題 研究代表者	古代中国文献に関する表現形式に基づく評価基準の構築 鈴木達明（本学非常勤講師・特別研究員）
【2014～2016年度「科研費」採択】 一般研究（中井班）	研究課題 研究代表者	生業の域内多様度とその形成過程：東南アジア大陸部におけるモン村落の事例比較 中井信介（任期制助教・特別研究員）
【本研究】 一般研究（飯田班）	研究課題 研究代表者	9.11後戦争形成過程の宗教社会学的研究 飯田剛史（教授・社会学）
【予備研究】 一般研究（井上班）	研究課題 研究代表者	低酸素環境下登坂歩行運動における登山熟練者呼吸スキルの解明 井上摩紀（准教授・体育学）

2014(平成26)年度「一般研究」(追加/「科研費」含)研究目的紹介

共同研究

新出土仏教遺物と文献史料の統合による13～17世紀北アジア史の再構築

研究代表者・教授 松川 節
(モンゴル学)

近年の歴史学的碑刻・文書調査と考古学的発掘調査により、13世紀～14世紀前半のモンゴル支配時代、そして14世紀後半～17世紀のポスト・モンゴル時代において、北アジアで独自の仏教文化が存在していたことが明らかになりつつあるが、それらの仏教文化に通時的な連続性・継承性があるか否かという問題はほとんど研究されず、看過されてきた。本研究は、モンゴル高原のオルホン河・トーラ河流域を調査対象域とし、新たに出土・発現した13世紀～17世紀までの仏教遺跡や文字資料が、従来の文献学的歴史研究といかに整合性を持つか、また統合可能かを明らかにしつつ、仏教をキーワードとして浮かび上がる北アジア史の新たな地平を追究すること、すなわち、新出土仏教遺物と文献史料の統合による13～17世紀北アジア史の再構築を目的とする。

本研究は2012年度から3年計画で推進しており、以下の4つの研究基軸を設けている：

- ①13・14世紀カラコルムにおける仏教遺跡の調査・研究
1. 新たに発掘された興元閣址から出土した遺物を考古学的、歴史学的、保存科学的な各側面から調査・研究し、その来歴及び年代を比定するためのデータを抽出する。
2. 同様に、仏教学・仏教美術史の専門研究者が、チベット仏教的、ウイグル仏教的、西夏仏教的、契丹及び中国仏教的な側面から比較研究を行い、カラコルムにおけるモンゴル仏教の諸要素を抽出する。
3. 13・14世紀モンゴル仏教に関わる文献記述を博捜し、その中でカラコルムに関わるものをデータベース化し、出土遺物と照合する。
- ②15～17世紀カラコルム廃墟とエルデニゾー寺院との関連についての調査・研究
1. 現存するエルデニゾー寺院の諸堂宇・外壁につい

て、考古学的、寺院建築学的、保存科学的な調査を行い、堂宇の基礎部分がモンゴル帝国時代に建造されていた可能性を検証する。

2. エルデニゾー博物館及びエルデニゾー寺院に所蔵される古文書の書誌情報データベースを作成し、エルデニゾー寺志に関する文字資料を学界に公表する。あわせて、モンゴル国最大の仏教寺院ガンダン寺図書館及びモンゴル国立図書館に所蔵される資料についても基礎的な研究を行い、関連資料を抽出する。

③出土遺物と文献史料との整合性の研究

1. 13～20世紀までのモンゴル仏教史に関わる文献史料のうち、モンゴル文、チベット文、漢文について、出土遺物によってもたらされた新たな史実と文献史料との整合性を検討する。

④北アジア仏教史

1. 以上の研究を通して拓かれる新たな北アジア仏教史を記述し、国際シンポジウムを開催して討議・検討し、評価を受ける。

2012年度・2013年度の研究成果を承け、2014年度は、これらの研究計画のうち、②の第2項および③の第1項について重点的に推進し、その成果を④に繋げていくことを目標とし、併せて、9月に国際シンポジウムを現地ハラホリン市にて開催し、研究成果のとりまとめを行っていきたい。

共同研究

モンゴル国カラコルム博物館における歴史研究を基軸とした情報化と国際協働の推進

研究代表者・教授 松川 節
(モンゴル学)

近十年来、モンゴル帝国の首都カラコルム遺蹟出土遺物の歴史学的研究は飛躍的に進展し、多くの新知見がもたらされている。この流れの中で、2004年にカラコルム地域がユネスコの世界文化遺産に登録され、2011年には日本のODA(文化無償)によってカラコルム博物館が新設され、文化遺産の収集・研究・観光振興拠点と位置付けられた。しかしながら資料保存環境、研究

員の質と量、観光振興の具体策などが整わず、地域の情報発信拠点として十分に機能しているとは言い難い。本研究は、諸外国との国際的協働によってカラコルム博物館収蔵の考古歴史遺物の研究を推進するとともに、同博物館の高度情報化をめざし、研究成果を情報展示によって地域に還元し、博物館を核とした地域振興策を新たに提案することを研究目的とする。

本研究は2014年度から3年計画で推進しており、以下の4つの研究基軸を設けている：

〈国際共同研究〉カラコルム博物館収蔵の13・14世紀モンゴル史関連資料についてドイツ科学アカデミー考古研究所と国際共同研究を実施し、成果を共有・公開する。

〈情報展示の導入〉カラコルム博物館においてタブレット型端末を利用したマルチメディア博物館ガイドシステムの導入実験を行い、ネットワークを介して大谷大学から試用・評価する。

〈文化財保存科学的研究〉博物館における文化財の保存保護について、日本の経験との交流を通して有効な方策を提案する。

〈官・民・学による地域振興研究〉モンゴル国文化省、地方行政府、地域住民と共に地域振興ワークショップを開催し、博物館の高度情報化による地域振興施策について意見を交換する。

2014年度は、これらの研究計画のうち、ポーランド・ロシアにおける資料収集、カラコルム博物館の施設及び情報インフラ調査とモンゴル語による博物館ガイドシステムの構築を行う。

近年、中国やモンゴル国においてこの契丹国に関する遺跡や文化財が続々と発見されつつあり、既存の文献史料等を補完するとともに、従来研究の成果を大きく変える可能性を有する重要なものが多くみられる。ただ、残念ながらそれらに関する報告成果は少なく、さらに図面などの客観的な計測資料化もあまりなされていないため、学術成果として取り扱うには困難な状態にあるので、本研究はそうした面を克服する嚆矢となるべく計画をしている。

上記のような目的・方針に従い、2013年度は発足初年度でもあったので4月に研究打ち合わせ会議を行ったあと、各種史資料のアーカイブ化を目指す上で必要な知見や資料評価のための情報収集を兼ねて8月に海外出張を行い、さらに1月には研究会を実施した。その概要は以下の通りである。

2013/4 研究会発足会議・打ち合わせ（於：大谷大学）

2013/8 中国遼寧省出張（於：中国遼寧省遼陽市・瀋陽市・鉄嶺市・阜新市および北京市）

2014/1 研究会（於：大谷大学）

今後の活動としては、データベースの構築を予定している。その最初の段階として、今年度は研究会内で分担して各種史資料のデータ収集と一覧表の作成、およびそれらの入力を行うこととした。また、年度後半にはこれらデータベース公開のためのホームページの試作などを計画している。

このほか、研究展開の過程で新たに認識された諸課題や新たな史資料群の把握とデータ修正にも取り組む予定である。具体的には、契丹文字の書体データとその比較、および、契丹大藏経の断片資料に関する所在目録の作成などを念頭においている。これらについても、成果が見込めるようであれば、研究最終年度である来年度にとりまとめと公開などを計画している。

共同研究

デジタルアーカイブ技術による 契丹国の歴史考古言語資料の 復原的研究と集成

研究代表者・准教授 武田 和哉
(歴史学・考古学・人文情報学)

本研究の目的は、契丹国（遼朝）に関する新出現の遺跡・出土文字史料・文化財などを対象として、極力コストを抑えた手法を利用しつつ、研究資源として他の研究者も利用可能なアーカイブ化を行い、成果物として集成し公開することを目指すことである。

共同研究

アブラナ科植物の伝播・栽培・食文化史に関する領域融合的研究

研究代表者・准教授 武田 和哉
(歴史学・考古学・人文情報学)

アブラナ科植物は、ハクサイ・カブ (B. rapa)、ダイコン (Rahpanus sativus)、キャベツ・ブロッコリー (B. oleracea)、カラシナ (B. juncea)、ワサビ (Wasabia japonica) 等多岐にわたり、東アジアの米主食文化では中心的副食として食されてきた。

日本では、近年に至り京野菜などに代表される地方の在来種野菜が注目されているが、いつ頃から日本社会に伝播・受容され、どのように栽培が広まったかという問題に関して、歴史史料と品種の遺伝学的背景や成果等を融合させた総合的研究が未だ存在せず、未解明な点が多い。また原産地に関しても諸説あって定見を見ていない。

本研究は、農学系・人文系の研究者の協業により実施する。具体的には、日本と世界各地において、関連する国際条約や国内法制などに留意しつつ、さまざまなアブラナ科植物の葉・種子サンプル採取などを行って、遺伝学的見地から品種間の系譜関係を明らかにするとともに、各地における栽培形態・食用文化・利用方法や関係技術等についても調査を行う。

最終的には、文・理系の学問分野の垣根を越えて、アブラナ科植物と人間社会の関わりを文化史的・遺伝学的見地から総合的に研究することを目的としている。

本年度は、研究班発足に伴う打ち合わせ会議を山形県内で実施する。山形県は、日本有数の地元野菜・在来品種の多い地域であり、これらの農産物資源を利用した食文化も多様であることから、国内調査も兼ねて関連施設の見学や、有識者・関係者から取り組み等に関する聞き取り調査と意見交流を行う予定である。また、夏期および春期には海外調査を予定している。調査地については、これから研究班内で意見交換を行い選定する予定であるが、訪問地では現地関係機関との交流や、食文化・歴史に関する調査と史料収集も行う予定にしている。

こうした調査活動と並行して、人文系研究者は日本

およびアジア地域ごとに分担を決めて、歴史史料の記述記録の収集や考古遺物・関連文化財等の出土事例情報の収集に努める。また、農学系研究者は国内に存在する在来種に関する情報を収集し、その作付状況や生産量等に関する基礎的情報の把握を行い、必要に応じて遺伝子分析等にも着手する予定である。

共同研究

日本における西洋哲学の初期受容 —フェノロサの東大時代 未公開講義録の翻刻・翻訳—

研究代表者・教授 村山 保史
(西洋哲学・日本哲学)

本研究の目的は、清沢満之 (1863-1903) と高嶺三吉 (1861?-1887) の遺稿中に発見された東京大学在学時の哲学関係講義録 (ノート) を翻刻・翻訳して明治期の外国人哲学教師 E. F. フェノロサ (1853-1908) の講義内容を公開することであり、この作業を通じて日本における最初期の哲学思想受容過程の一側面を解明することである。

研究方法としては〈調査・分析〉を主たる作業とした2010年～2012年度の科学研究費研究「日本における西洋哲学の初期受容—清沢満之の東京大学時代未公開ノートの調査・分析—」を継続しつつも、それを発展展開した研究として、清沢および高嶺筆記による講義録の〈翻刻・翻訳〉に重点を置く。このため、本研究では以下の三つの研究課題を設定している。研究課題(1): 講義録の編集、研究課題(2): 講義録の思想的分析、研究課題(3): 清沢における西洋哲学受容の思想的分析。

研究課題(1)を重点課題とし、研究課題(2)と(3)を平行して行った2013年度に続き、2014年度は、研究課題(1)～(3)すべてを重点課題とする。さらに詳細には、研究代表者の統括下、以下の作業を行う。

- (A)編集作業: 講義時期と講義科目を再確認したうえで講義録の翻刻・翻訳作業 (デジタル画像化された資料と原資料との照合作業を含む)。
- (B)講義録に示されるフェノロサ思想の分析作業。
- (C)清沢における西洋哲学受容の思想的分析作業。
- (D)研究会の開催: (A)～(C)の進捗確認を目的として数回の共同研究会議を開催する。

- (E)公開講演会の開催：研究活動成果公開の一環として、外部講師による講演を含む公開講演会を開催する
 (F)HP上での研究成果公表：上記作業のHP上での成果公表は、逐次行う。

個人研究

ポタラ宮所蔵スティラマティの俱舎論注釈書『真実義』梵本写本第一章の研究

研究代表者・名誉教授 小谷 信千代
 (仏教学)

本研究は、スティラマティ（安慧）による俱舎論注釈書『真実義』サンスクリット写本の解読を目的とする。『真実義』は、チベット自治区に現存するアビダルマ文献の写本群のうち、最も重要な文献である。それは、『真実義』が、インドで著された『俱舎論』注釈書のなかで最も大部であり、かつ詳細な内容を持つものだからである。それにもかかわらず、従来は不完全なチベット語訳やウイグル語訳、部分的に残る漢訳などによってしか読むことができなかった。ところが、チベットのポタラ宮にサンスクリット写本が保管されてきたことが判明し、その解読研究に取り組むことができる状況が整ったことにより、本研究を開始した。

(1)本研究課題は、研究期間内に第1章「界品」注釈文の全体の校訂を完了させることを目指す。現在の状況は、第1章「界品」注釈文のうち、およそ27葉分の校訂テキストと翻訳文の作成を終えている。残りは18葉である（第1章「界品」注釈文のコロフォンは第45葉に位置する）。ただしこの18葉も、先の27葉と同様、写本の文字が鮮明でないなどの理由により判読できない箇所もある。そのため、スティラマティの『五蘊論釈』やヤショーミトラの『俱舎論釈』との平行句の同定、そして何より、サンガバドラの『順正理論』（漢訳）との比較対照を欠くことはできない。『真実義』梵文写本に関して言えば、チベット語訳『真実義』との対照が解読に資することは少ないため、その解読には時間を要する。そのため本研究課題は第1章「界品」注釈文に焦点を絞り、完成を目指す。

現存する唯一の写本であるため、その解読成果もまた独占点を有する。(2)スティラマティの『五蘊論釈』やヤショーミトラの『俱舎論釈』との平行句を同定することが可能である。そして何より、漢語でしか現存しないとされてきたサンガバドラの『順正理論』の梵文、並びにこれまでいかなる資料からも回収しえなかった阿舎の経文を多く回収することが可能である。これらは重要な文献学上の成果である。

従来の研究においてスティラマティという人物は、ヴァスバンドゥの著作群に対する一注釈家としてのみ捉えられてきた。しかし上述した点を総合することにより、スティラマティ自身の背景、歴史的文脈の一端を明らかにすることができる。具体的には、(1)『順正理論』の文脈を精密に捉えながら、スティラマティが『俱舎論』の注釈書を著した事実を窺い知ることが可能である。(2)またアビダルマ教義学に着目すれば、チベット文のみでは確定困難であった議論の脈絡を丹念に辿り、いくつかの点において議論の展開を明確にすることが可能である。というのもスティラマティによる注釈内容は、上述したように、インド撰述のいかなる『俱舎論』注釈書より詳しく、より大部だからである。この点はスティラマティの力量を窺い知るに充分であり、『真実義』が最重要の注釈書と目される由縁である。

共同研究

紋章との比較による系譜の図像化規則とその構造分析

研究代表者・准教授 柴田 みゆき
 (情報処理学)

系図は、系譜の膨大な情報をコンパクトに、わかりやすく提示する優れた手法である。しかし、国や地域によりその手法が異なる。欧州では個人とその親族関係が特定可能な紋章が利用されてきたが、そのシステムは複雑かつ厳密な上に例外処理も多く、すべてが解明されたとはいえない。一方、日本では狭義の系図ともいえる線分を利用した簡便で一覧性に富む表記手法が一般的であるが、長年にわたり慣習的に使われてきたため曖昧な点が多く、構造分析も不十分である。

本研究の特色は、構造分析が進んでいる紋章を手掛

かりとして、ほとんど手つかずとあってよい状況にある狭義の系図の構造分析を進めることにある。紋章と系図の相互利用のための定義を行い、もって異文化理解に寄与することを最終目的とする。

本研究は5年間をかけて、以下の3点を明らかにする。なお、個人情報保護のために、対象とするデータは古代から中世までの系図情報とする。

一点目として、既存のアーカイブなどの資料調査を行う。まず、海外書籍と論文の調査を行う。欧州では紋章学は一つの学問領域として確立されているが、日本においては認知度が低く、書籍も少ない。そこで、海外の学術書を調査し、資料分析する。次に、データベースの調査を行う。2013年に公開されたフィンランドの“Europeana Heraldica”に代表されるように、近年は紋章に関するデータが国家的ないし国際連携プロジェクトの成果としてインターネット上で公開されることが多い。これらの最新データを活用する。

二点目として、実地調査を行う。まず西欧に目を向けると、紋章学が最も研究され、現在も紋章裁判所の存在する国はイギリスである。2013年、紋章に関する最古の裁判記録が発見され、現在、大英図書館にて受け入れ作業が進んでいる。同資料調査を中心に各研究機関などを対象とした調査旅行を行う。一方、東欧に目をむけると、紋章研究はポーランドが最も進んでいる。同国における紋章学の権威であったコジエロフスキの研究拠点を中心に各研究機関などを対象とした調査旅行を行う。

三点目として、2006年から継続的に行ってきた狭義の系図の構造分析をさらに進めると同時に、上記2点の研究成果から得られた紋章の構造分析とを比較分析する。

本研究の1年目となる2014年度は、既存のアーカイブなどの資料調査を中心とした研究を行う予定である。同時に、狭義の系図の構造分析をさらに進め、研究成果をわかりやすく提示する一手段としての、現在開発中の系図表示ソフトウェアへの適用可能性を検討する。

本研究の成果は、随時学会等で発表を行いつつ、最終年度に研究成果報告書をまとめると同時に、上記系図表示ソフトウェアへの適用を行う予定である。

個人研究

日本で発見されたオリヤー語『マハーバーラタ』「津島貝葉」の校訂テキスト作成

研究代表者・准教授 DASH Shobha Rani
(インド学・仏教学)

現在、宇和島市教育委員会津島支所教育課に「津島貝葉」という貝葉写本が保管されている。それは、17世紀初頭に書写されたもので、恐らく江戸時代中期（18世紀）頃に日本に伝来したと考えられている。コロニー（Karaṇī）書体を使用し、中世オディア語（旧名オリヤー語）で偈の形式で書かれた221葉（両面記載）からなるこの貝葉写本の内容はインド東部・オディシャー州の15世紀半ばの有名な詩人サーララーダーサ（Sāraḷādāsa）によってオディア語で書かれた『マハーバーラタ』すなわち、『サララー・マハーバーラタ』（*Sāraḷā Mahābhārata*）の「森林章」の第1部に相当するものである。

日本における『マハーバーラタ』の研究と言えば、数多くの成果があるが、その殆どがサンスクリット語テキストに基づくものに限られている。インドには、サンスクリット語だけでなく、オディア語を含む様々な地方言語で書かれた『マハーバーラタ』が数多く存在することはあまり知られていない。しかしそれらは、サンスクリット語で書かれた『マハーバーラタ』の単なる翻訳ではなく、それぞれの地方の文化の影響のもと成立した独自のテキストと言える。

筆者は2008年度～2010年度まで「日本で発見されたオリヤー語『マハーバーラタ』の研究」という題名で（基盤研究C、課題番号20520048）3年間、「津島貝葉」のデジタル化、校訂ノート付きのローマ字転写テキスト（Diplomatic Edition）の作成、物語ごとに題名を付けた組立てや関連資料の収集をした。その際、『サララー・マハーバーラタ』の校訂テキストは40年も前に出版されたものが唯一であること、そしてそこに、数多くの校訂ミスが存在することに気付かされた。このような現状を鑑み、これまでの研究の継続として「津島貝葉」の異本の入手および「津島貝葉」を底本とした『サラ

ラー・マハーバーラタ』「森林章」第一部の校訂テキスト (Critical Edition) の作成を目的としている。

2014年度は当研究期間の最終年度にあたる。上記のような研究目的を果たすために、今年度は、「津島貝葉」の校訂本作成のために過去の3年間に渡って入手してきた異本の文字解読、ローマ字転写を行なう。そして、各異本からの異読箇所を取り出し、偲ごとに並べる。このような基礎作業を踏まえて、バリエーションのリストを作成することが今年度の主な研究作業である。

個人研究

清代生態環境档案を用いた 西北開発における環境認識と 技術的対応に関する研究

研究代表者・講師 井黒 忍
(歴史学・東洋史学)

現代社会が抱える重要課題の一つである環境問題は、人間活動によって引き起こされた人間自身の問題であり、本質的な解決策を導き出すためには気候変動などの外在的要因の解明に止まらず、人間活動の背景にある思考法や価値観など内在的要因を明らかにする必要がある。思考法や価値観は歴史的推移の中で形成され変容を経たものであり、伝統的な思考法や価値観は現代を生きる我々の思考にも大きな影響を与えている。したがって、過去の人間が自らをとりまく自然環境をいかに認識し、環境問題の解決に向けてどのような取り組みを行ったのかを理解することは、単に「過去に学ぶ」或いは「古人の智慧に学ぶ」といった間接的意義に止まらず、現在の人間を理解する直接的意義を有するものとなる。

そこで、本研究では18-19世紀に行われた西北開発政策を分析し、そこから自然環境および環境問題に対する当時の認識を読み解き、問題への技術的対応のあり方を明らかにする。対象地域は乾燥地域に属し、現在も深刻な環境問題を抱える中華人民共和国甘粛省・陝西省を中心とした西北地域であり、中心となる資料は康熙-宣統朝(17-20世紀)の気象・水利・農業・人口・牧業に関する档案を集成した「清代甘粛地区生態環境档案」および「清代陝西地区生態環境档案」であ

る。

本研究の具体的な目的は、18-19世紀に西北開発を押し進める上で問題となった沙漠化について、地方官および中央政府がいかにこれを認識し、いかなる技術を用いて克服しようとしたのかを明らかにすることである。認識という人間の内的問題を文献史料の記載から読み解くことに加えて、その認識を具現化する技術という外面的措置を分析することで、内面・外面の双方から問題点の所在やその限界点を抽出し、人間の認識力・発想力の持つ問題点を明らかにする。さらに、開発政策の立案・実施の経緯から結果に至るまでを総合的に考察することで、開発が自然環境に与えるインパクトとそのリアクションとしての環境変化が引き起こす諸問題を明らかにする。

本研究では地質学・地理学・農学など自然科学の知見との比較検討を通して、環境認識に関する文献の記載内容を読み解き、史料読解とフィールド調査を相互補完的に行うことで、水利施設などに用いられる具体的な技術を明らかにする。国内・外および学問領域の枠を越えた研究協力者との連携を通して本研究を推進することで、新たな歴史研究の形を提示するとともに、過去の事象を明らかにすることによって、現在進行中の環境問題とその対応策に対しても新たな視座を提示することが本研究のねらいである。

個人研究

触法知的障害者の更生と 地域生活定着を促進する ピアサポートプログラムの 開発と評価

研究代表者・教授 脇中 洋
(発達心理学・法心理学)

研究目的

本研究(2012~2014年度・科研費基盤研究(C)課題番号24530750)では、知的障害や発達障害のある受刑者(触法知的障害者)が矯正施設出所後にスムーズに地域生活へと定着していくために必要な要因として、当事者の自己肯定感や自己効力感の醸成を掲げ、具体的な取り組みを通じて効果検証することを目的としている。

元来、知的障害や発達障害のある受刑者は社会的に

弱い立場にあるため、被害体験を持つ者が少なくなく、自尊感情に乏しい者が多い(内田他2011)。彼らの更生の過程において不可欠なプロセスとして、自らの経歴を振り返り最低限の自己肯定感、自己効力感を取り戻すことが重要であると考えている。こうして過去を振り返り新たに生き直す矜持がなければ、自らの加害経験を見つめて反省悔悟し、被害者に対して慰謝の念を抱くことも難しいと思われる。このような背景および課題のもとに、矯正施設内プログラムを通じた受刑者の変容過程を分析し、その効果を実証する。

これまでの2年間では、更生保護の実態調査としてカナダBC州ヴィクトリアの仮出所者の事例聞き取り調査をしたり、米国ホノルルの受刑者に対するプログラムの実施状況を調べてきた。

また国内では更生保護施設の調査を行ったり、播磨社会復帰促進センターと共同研究協定書を締結して、クラウニング講座の効果検証に取り組む準備を進めてきた。

2014年度は、播磨社会復帰促進センターにおけるクラウニング講座の効果検証を行い、またこれまで続けてきたヴィクトリアの更生保護調査や、ホノルル女性刑務所におけるプログラム調査のとりまとめを行う。

もちろんクラウニング講座など特定の一つのプログラムが単独で効果を発揮しているのではなく、他の受刑活動や生活支援と連動することによってその効果が発揮されていると考えている。そこで講座の効果検証にあたっては、矯正施設での受刑作業や生活面での変化を刑務官の協力を得て聞き取っていくことを計画している。このため刑務官を含めた職員を対象とした組織論的な連携も評価対象とし、個人の発達臨床的かつ能力論的な変容だけでなく、領域横断的な調査及び評価を行う。

文献

小野隆一、木下大生、水藤昌彦(2011)「福祉の支援を必要とする矯正施設等を退所した知的障害者等の地域生活以降を支援する職員のための研修プログラム開発に関する調査研究(その1)」, 独立行政法人・国立重度知的障害者総合施設のぞみの園, 1-11.

日本犯罪社会学会(2009)『犯罪からの社会復帰とソーシャル・インクルージョン』現代人文社

内田扶喜子、谷村慎介、原田和明、水藤昌彦(2011)『罪を犯した知的障がいのある人の弁護と支援 司法と福祉の協働実践』現代人文社

個人研究

バガヴァティー・アーラーダナーの新校訂本作成と全訳による ジャイナ教の断食死研究

研究代表者・本学非常勤講師 河崎 豊
(インド学・仏教学)

ジャイナ教修道論上の大きな特色として、最期を断食死で迎えることを理想のひとつとする点があげられる。このような特色に根差す身体観や死生観は、単に南アジア宗教研究という側面のみならず、死生学や倫理学といった関連諸分野の観点からも注目されるものである。これまで、ジャイナ教における断食死の実態に関する研究は僅かながら行なわれてきたが、研究の基礎となる一次文献の批判的校訂や現代語訳については全くといってよいほど存在しない状況にある。

このような状況を鑑み、シヴァーリア(1~2世紀?)作『バガヴァティー・アーラーダナー』を研究対象とする。当該文献がジャイナ教における断食死の次第を扱うものとしては最古層に位置すること、その後多く作成された断食死マニュアルの範となったこと、記述内容が断食死の次第にとどまらず、当時の文化事象一般について豊富な情報を提供すること、記述言語が言語学的に十分に解明されていないジャイナ・シャウラセーニー語であること、などから、ジャイナ教における断食死の文化を解明する上では第一級の資料である。しかし、当該文献の全体にわたる批判的校訂本は存在しない状況にある。

前年度までは、インドより出版された2種の刊本に基づきつつ代表者が作成した『バガヴァティー・アーラーダナー』の暫定的な校訂本と下訳に基づいて定期的に研究会を開催してきた。また前年度は当該文献の写本状況の調査の一環としてバリ第三大学 Nalini Balbir 教授のご協力の下、ストラスプール大学図書館に保存される写本2種を入手し、また2013年12月にインド共和国グジャラート州で写本状況の予備的な調査を行なった。

本年度は昨年度までの作業を踏まえ、現時点で入手している写本を活用しながら、現在出版されている『バガヴァティー・アーラーダナー』の刊本における校訂上の問題点を集約して報告する。個別内容としては、当

該文献において説かれる戒律部分、特に「不淫の掟」において見られる諸問題を一括して学術誌上で報告する。また、2014年12月には南インドの空衣派ジャイナ教徒が所有する当該文献の写本状況を調査するために渡印し、カルナータカの空衣派ジャイナ教を長く研究してこられたマイソール大学名誉教授の Hampa Nagarajaiah 博士と意見交換を行なう予定である。

個人研究

タイ国を中心とする 東南アジア撰述仏教説話写本の研究

研究代表者・本学非常勤講師 清水 洋平
(仏教学・南伝仏教)

現在、東南アジア大陸部で伝承されてきた東南アジア撰述の仏典写本は、一部の寺院の経蔵に無差別に保管されているものが多く、所在やその内容は不詳のものが多い。また、所蔵環境も良くないことから隠滅の危機に瀕しているものが多い。この状態を危惧する研究者並びに研究機関がその調査・収集、或いはカタログの作成に努力している。

このような現状を踏まえての本研究は、タイ国を中心に従来より同地に継承されたクメール文字で記された貝葉写本を中心に、同国に流布する東南アジア独自撰述の仏教説話写本を調査・収集し、その網羅的な研究を目指すものである。先ずタイ国中部地域の寺院が所蔵する貝葉写本の所在目録を作成し(ほぼ完了)、個々の文献の一次資料としての資質を検証し、併せて既出の所在目録との横断的な整理を行う。そのことを通じて、東南アジア撰述仏教説話写本研究の基礎となる一次資料所在目録及びデータベースの構築とその公表を目的とする。以降、個別写本研究に進み、特に東南アジアの積徳行について文献学的な裏づけに基づく仏教学の立場からの研究に歩を進める。

本研究は、従前の科研プロジェクト「タイ国中部地域の王室寺院が所蔵する東南アジア撰述仏教説話写本の研究」(研究活動スタート支援22820077)を承け、その研究課題の中で作成した同地域の寺院が所蔵する貝葉写本の文献タイトルのみを記した所在目録を改善し、国内外の研究者、研究機関の要望に的確に応え得る新たな所在目録・データベースの構築を先ず行うため、本

年度は、次の計画で研究を進める予定である。

- (1)昨年度までに整理された所在目録(個々の文献の写本資料としての資質を整理し、文献ごとに様々な既出の所在目録との横断的な整理をしたもの)について、その正確性を高めるために貝葉写本文献の現地での比定確認作業を実施する。
- (2)現在までの調査で収集してきた東南アジア撰述仏教説話文献を中心とした約4万枚近くのデジタル画像資料を所在目録に反映させる。
- (3)上記(1)、(2)が整理された新たな所在目録・データベースを構築する作業については、東南アジアの仏典写本のカatalog作成の第一人者である Jacqueline Filiozat 女史(フランス極東学院名誉講師)から全面的な協力の申し出を受けている。同女史と緊密な連携を図ることで、完成を急ぎたい。その上で、「アーニサンサ(Ānisaṃsa)」と呼ばれる一群の積徳行に関わる釈義文献について、関連資料の所在・残存状況、手持ち資料等を考慮しながら、「アーニサンサ」という名称が題名に付される典型としての写本文献を選択する作業に取り掛かり、「アーニサンサ」と呼ばれる一群の積徳行に関わる釈義文献の文献学的研究をスタートさせる。

個人研究

後期田辺哲学における 象徴概念の研究

研究代表者・本学非常勤講師 竹花 洋佑
(哲学・日本哲学)

本研究の目的は、田辺元の象徴概念の理解を通して彼の後期哲学の意味と可能性とを明らかにすることである。本研究は次の三つの課題から構成されている。(1)田辺の象徴概念の基本的意味とその思想史的背景を明らかにすること。(2)後期の田辺哲学の中での象徴の意味と位置を、彼の宗教哲学ないしは共同体論の核心的概念である「実存協同」との関わりにおいて解明すること。(3)『ヴァレリイの藝術哲学』および『マラルメ覚書』の中で田辺が論じる象徴詩の問題との関係で田辺の象徴概念の具体的な意味と可能性とを明らかにすること。

第一に、象徴概念の基本的意味を明らかにしておく

ことが研究の前提として必要とされる。まず田辺が象徴概念を提起する際の背景を発展史のおよび思想史的なアプローチから明らかにすることが求められる。象徴概念は後期哲学の出発点となった『懺悔道としての哲学』において重要な位置を占めるものであるが、それはかなり唐突な仕方でも語られるものである。したがって、象徴概念の基本的な意味を理解するためには、田辺のそれまで思索の展開において象徴ということが論じられる必然性がどのようにして生じてきたのか、さらにそうした必然性が生まれる契機となった思想史的背景はどのようなものであったかを理解する必要がある。第二に、象徴と種という二つの概念の関連性を捉えることが求められる。すでに述べたように両者は共に否定的媒介性という意味を担う概念であり、象徴の基本的意味を捉えるためには、その否定的媒介性の内実が種とどのような共通性と相違性をもつかが具体的に見定められなくてはならない。

第二の課題は、後期の田辺哲学の中での象徴概念が有する意味と位置とを、彼の宗教哲学ないしは共同体論の核心的概念である「実存協同」との関わりにおいて解明することである。象徴と種との関連性を捉えるにあたって留意されなければならないのは、否定的媒介性を担うものは種から象徴へと移行するにもかかわらず、後期においても種という概念は放棄されているわけではないという点である。後期における種と象徴との並存という問題を捉えるためには、媒介性という論理的なアプローチ以外の視点が求められる。すなわち、種も象徴も共に田辺の共同性の概念に関わりをもつことに注目することによって、後者の前者との関わりおよび後者の概念の後期における位置を田辺の「実存協同」という構想との関係で明らかにする必要がある。

最後に田辺が論じる象徴詩ないしは象徴主義との関係で象徴概念の具体的な意味を明らかにしていく。そのためにはまず田辺がヴァレリーやマラルメの象徴詩をどのように理解しているかを明らかにすることが必要となる。田辺の象徴詩の解釈の内実を、田辺が批判的に対決している解釈やそれ以外の現在の主な解釈との関係で明らかにした上で、象徴概念の哲学的意味の解明を行なっていく。具体的には、その意味を死や偶然性の問題において顕わとなる人間の個性性と「実存協同」として語られる個体の共同性とが結びつく地点として捉えることを目指していくことにする。

(1)の課題を中心的に研究した昨年度の成果をふまえて、本年度は(2)(3)の課題に取り組んでいく予定である。

個人研究

「宗教間体験の現象学」 構築のための基礎的研究

研究代表者・任期制助教 古荘 匡義
(宗教哲学)

宗教間対話に関する既存の哲学的分析では、対話の問題を他の宗教の「理解」の問題として捉えがちだが、そうすると、特に宗教同士が対立する場面での対話の可能性を考察することができなかった。というのも、他の宗教を理解するためには、自らの宗教を相対化する必要があるが、宗教同士が対立している状況では、各信仰者がしばしば信仰内容を絶対的かつ排他的に受容しているため、自らの宗教の絶対性を反省して他の宗教を理解しようという動きが生じないからである。

しかし、宗教同士の関係は「理解」の次元に留まるわけではない。そこで本研究では、宗教間対話について、他の宗教と関わることになった各個人の「体験」から考察することによって、宗教対立の場面を含む、さまざまな状況での対話の可能性を提示できる理論を構築する。ここでいう「体験」とは、たとえば、他の宗教に対峙している状況のなかで他の宗教から実存的な衝撃を受けたとき、自らの信仰に対する絶対的な確信は揺るがないけれども、自らの信仰に対する態度や信仰内容が変化してしまう、というような事態を指している。この体験において、他の宗教の「理解」も、自らの信仰の相対化もなしに、何らかの信仰者同士の交流が成立している。そこで、このような「体験」を「宗教間体験」と捉え、この体験を行う自己の根源的なあり方を解明する。そして、この体験の分析に、研究代表者がこれまで研究してきたミシェル・アンリの哲学を用いることができる。というのも、彼の哲学は、さまざまな実践を行う自己の根源的な体験や変容について記述するための理論を提供してくれるからである。

2年間の研究計画の中で、1年目(平成25年度)は、ミシェル・アンリの「キリスト教の哲学」の意義を解明することによって、宗教間対話の背景に存する「宗教間体験」を現象学的に記述するための理論の基盤を構築することができた。この成果はまだ論文として公開できていないが、課程博士論文「ミシェル・アンリの『実践=哲学』」(平成25年12月に京都大学に提出)の

結論部で発表している。また、日本宗教学会の学術大会等で研究成果を発表し、宗教間対話に関心をもつ研究者との議論や交流を行うことができた。

2年目(平成26年度)の研究では、1年目に引き続き、「宗教間体験」理論の完成を目指すとともに、この理論を具体的な事例に適用して検証する。この具体的事例として、当初はダライ・ラマ14世の宗教間対話の実践を扱う計画であったが、それに加えて、明治30年代に日本で開花した高山樗牛・網島梁川・清沢満之らの思想的実践も取り上げる。この3人はともに当時の大学で哲学を学んでいるが、結核による闘病生活のなかで煩悶や挫折、あるいは宗教的修養や「見神」を体験しながら、哲学的な言説を大きく変容させている。彼らの思想は、修養や体験を言説化しながら、哲学や諸宗教の思想を貪欲に摂取しつつ深化していく。この思想の深化の過程を思想的実践として、「哲学と諸宗教の間の対話的な体験」として分析する。

個人研究

ディケンズと絵画

研究代表者・任期制助教 木島 菜菜子
(イギリス文学)

本研究の目的はチャールズ・ディケンズの文学と絵画との相関関係を実証的に示すことである。ディケンズは自分を「想像性溢れる写真家」と表現し、視覚的な表現に極めて意識的な作家であった。同時代の批評においてもその視覚性や対象の精緻な描写が高く評価され、近年は特にヴィクトリア朝時代に発達した科学技術や視覚文化からの影響についての研究が進み、演劇や大衆文化との結びつきや、挿絵画家との関係の多くが明らかになってきた。また、ディケンズの独特な視覚的表現が映画の手法を先取りしたとの評価は定着しつつある。しかし、例えば同時代の作家ジョージ・エリオットに関しては絵画との関係を総括的かつ体系的に論じた研究書が出版されているのに対し、これまでディケンズの研究では、絵画との関連は全くと言っていいほど論じられてはこなかった。本研究は、ディケンズの視覚的想像力が絵画から受けた影響や絵画に及ぼした影響をまとめ、その分析を作品理解に生かすこ

とで、ディケンズ文学の核心にある視覚性に新しいアプローチを提示することを目的とする。

1980年代初頭に L. Ormond がディケンズの画家との交流や所持していた絵画作品などを初めて調査した(“Dickens and Painting”; 1983, 84)。しかしながら、オーモンドの研究はディケンズの作品論には至っておらず、一次的な調査に留まっている。その後、R. Lettis がディケンズによる美術への言及をまとめた(*The Dickens Aesthetic*; 1989) が、これも概説的なものに留まり、ディケンズ作品の新たな解釈やその芸術性の分析には結び付けられていない。その後もディケンズと絵画というテーマは発展させられず、生誕200年を記念してイギリスで開催された Dickens and the Artists 展(2012)のカタログも同時代の画家への影響を示すのみで、ディケンズの作品理解を深める論考はみられなかった。国内では松村昌家がヴィクトリア朝の小説と絵画の比較文化論を行っているが、その研究も作家と画家に共通した関心事を調査する程度に留まっている。本研究のもととなる研究で、申請者がこれまでに明らかにしてきた成果は、(1)イタリア絵画との関係、(2)オランダ・ジャンル画との関係とディケンズのリアリズムへの志向性、(3)画家 W. P. フリスへの影響と社会派リアリズム絵画の発展に及ぼした影響、(4)ターナーの風景画の影響、の4点である。

これまでのディケンズの批評では、いわゆる「リアリズム文学」の範疇には収まりきれない想像的飛躍を最も高く評価することが通例となってきており、申請者もこの評価に与するものである。その上でこれまで軽視されてきた絵画との関係を新しく評価することは、ディケンズ文学の核心にある想像性あふれる視覚的描写への新たなアプローチを可能にする。

個人研究

グローバル化時代における「人権」概念とセクシュアル・マイノリティの包摂

研究代表者・任期制講師 赤枝 香奈子
(社会学)

本研究は、近代において社会の周縁に位置づけられてきたセクシュアル・マイノリティが、現在のグローバル化する社会の中でその「人権」を認められ、社会

に包摂されつつある現状に注目し、それがいかなる歴史の変遷を経てのことであるのか、そこで使われる「人権」概念を再検討しつつ、セクシュアル・マイノリティの可視化と承認のプロセスを明らかにすることを目的とする。その際、セクシュアル・マイノリティの中でも特に不可視とされているレズビアンについて、日本とフィンランドという、女性同性愛に対する異なる抑圧形態をもった二つの国を比較し、彼女たちに対する差別や偏見、不可視化の圧力と、それに対する対抗的生き方やネットワーク形成のあり方について検証する。

昨年度は、日本でレズビアン・フェミニズムの運動が始まったとされている1970年代以降について、レズビアンについて触れた新聞・雑誌記事やレズビアン・コミュニティのミニコミ誌を収集し、分析する作業に着手した。また、セクシュアル・マイノリティの人権をテーマとするセミナーや「セクシュアル・マイノリティと医療・福祉・教育を考える全国大会」、セクシュアル・マイノリティに関係する資料を収集しているLoudで開催された「Loudライブラリ見学会」等に参加し、セクシュアル・マイノリティをめぐる現状とその記憶化の作業について調査した。フィンランドでは、セクシュアル・マイノリティにかんする資料・記憶のアーカイブ化を進めているフィンランド労働博物館で開催されたシンポジウム、*Queering the Memory Institutions* に出席し、セクシュアル・マイノリティの歴史をたどり、それを残すという作業についての現状と手法を学んだ。また、セクシュアル・マイノリティの文化的包摂にかんする提案および実践にかかわる組織、*The Culture for All Service* のディレクターや、フィンランドで長年に渡って開催されたレズビアン文化イベントに尽力した人物等にインタビューを行った。その結果、セクシュアル・マイノリティの社会的包摂にかんする多様な活動、アプローチについて知見を得ることができた。これらの作業と並行して、グローバル化時代における「人権」概念がいかなるものか考察するため、関連する文献を収集し、読解を進めた。

今年度は、日本において女性の同性愛（者）に対するホモフォビアがどのように形成されてきたかを明らかにするため、関連する新聞・雑誌記事の収集、分析を行う。また、セクシュアル・マイノリティの支援を行っている団体や個人に対するインタビュー調査を、日本とフィンランドで実施する。

個人研究

共感覚の進化的起源を探る

研究代表者・講師 高橋 真
(比較認知科学)

共感覚とは、ある刺激に対して通常感覚 (e. g. 視覚) だけでなく、別の感覚 (e. g. 聴覚) が生じる知覚現象である。「音を味わう」や「数字に色がついて見える」などの特殊な知覚経験が共感覚症として知られている (Ramachandran, 2003) が、一般的な知覚経験にもある。例えば、「黄色い声」や「高音・低音」、「明るい声・暗い声」といった比喩表現である。このような共感覚が存在する理由を明確にするには、共感覚の進化的過程を探り、共感覚が生じた時の選択圧を知る必要がある。そのため、ヒト以外の動物との比較研究が重要となる。

ヒト以外の種の共感覚として、チンパンジーがヒトと同じように「明るい音・暗い音」のような共感覚的な知覚をすることが示されている (Ludwig, Adachi, & Matsuzawa, 2011)。チンパンジー以外の種では、高橋・谷内 (2013) が同様の手法で、ラットも音と光の明暗の共通性を知覚している可能性を示している。また、視覚的ノイズと聴覚的ノイズの間の共感覚をラット (高橋・谷内・藤田, 2010) やハムスター (高橋・別役・玉井・谷内・藤田, 2011) が行っている可能性も示されている。ただし、同じ手法でも、「明るい音」や「高い音」のような共感覚的知覚がラットでは生じていない (高橋, 2013)。

これらの研究から、共感覚が比較的広い範囲の種に存在している可能性が明らかである。その進化的起源を知るためには、さらに広範な種での比較が必要となる。そこで、魚類のキンギョ、ネズミ目のラット、および、ヒトの共感覚を調べることで、その進化的起源を探る。同時に、共感覚が生じる組み合わせの種差を調べることで、その選択圧も推定する。

引用文献

- Ludwig, V. U., Adachi, I., & Matsuzawa, T. 2011. Visuoauditory mappings between high luminance and high pitch are shared by chimpanzees (*Pan troglodytes*) and humans. *Proceedings of the National*

Academy of Sciences, 108, 20661-20665.

Ramachandran, V. S. 2003. The phenomenology of synaesthesia. *Journal of consciousness studies*, 10, 49-57

高橋真 2013 ラットにおけるクロスモーダル知覚の検討『大谷大学真宗総合研究所紀要』30巻, p125-140.

高橋真・谷内通・藤田和生 2010 ラットはクロスモーダル知覚をするか? 『動物心理学研究』, 60巻, p187.

高橋真・別役透・玉井智之・谷内通・藤田和生 2011 ハムスターはクロスモーダル知覚をするか? 『動物心理学研究』, 61巻, p213.

高橋真・谷内通 2013 ラットは音と光の明るさの共感覚を示すか? 『動物心理学研究』, 63巻, p165.

個人研究

インド・チベットにおける般若学の研究

研究代表者・名誉教授 白館 戒雲
(仏教学)

本研究は、『二万五千頌般若経』とその綱要書『現観莊嚴論』とそれに対するハリバドラの『明義釈』について、チベットでの最有力な註釈書、ギャルツァブ・タルマリンチェン著『心髄莊嚴』の和訳研究を通じて、解明しようとするものである。一昨年度と昨年度は、第1章「一切相智」のうち、「発心」「教誡」の部分を和訳研究し、ツルティム・ケサン、藤仲孝司「タルマリンチェン著『現観莊嚴論』の註釈・心髄莊嚴』第1章より「発心」の和訳研究」(『成田山仏教研究所紀要』36, 2013)、同「同「教誡」の和訳研究」(『成田山仏教研究所紀要』37, 2014)として発表した。本年度は、それに続く部分として、同じく第1章の「順決択分」の和訳研究を行う。

『心髄莊嚴』は、ハリバドラの『明義釈』を踏まえているが、経文や解説、チベットの註釈者(特にロデン・シェーラブ、ニヤボン・クンガベル)や論争相手(特にロントン)について、省略している場合も多い。そこで欠かせないのが、ツォンカパ著『善積金鬘』とセラ・ジェツンパの註釈である。『善積金鬘』は他のイン

ド、チベットの註釈書を参照している。セラ・ジェツンパは省略部分を詳述している。そこで、枝葉末節の問答を除いた大部分を和訳した上で、関連典籍を精査する。

副次的な研究としては、ツォンカパ著『菩提道次第大論』を和訳研究し、公刊する。「菩提道次第」は『現観莊嚴論』の教誡であるともされ、小士、中士、大士の実践階梯からなり、チベット・モンゴルで最重要の典籍である。本研究者は、すでに『仏教瑜伽行思想の研究』(1991)において、大士の部分より止住の本文校訂と和訳などを行った。『尊者ツォンカパの『道次第大論』』(2001, 2004)においては、全体の校訂と研究を行った。さらに、小士、中士の部分は、『ツォンカパ 菩提道次第大論の研究』(2005)で和訳研究した。残る大士の部分は、発菩提心、六波羅蜜、四摂事、止住、勝観より構成されているが、その和訳研究としては、暫定的ながら「ツォンカパ著『道次第大論』「大士の道次第」より「発菩提心」和訳」(『法談』53, 2008)、「同「六波羅蜜、四摂事」和訳」(同54, 2009)として発表した。本年度は、大士の道次第のうち、発菩提心から止住までの旧稿すべてを見直し、註釈文献を精査した上で、刊行したいと考えている。

個人研究

『中辺分別論』の未解説チベット語註釈写本の研究

研究代表者・本学非常勤講師 松下 俊英
(仏教学)

本研究は、大谷大学図書館所蔵のチベット蔵外文献に収められている、『中辺分別論』のチベット人(作者不明)による註釈写本を研究対象とし、当該写本の読解を目的とする。

世親が註釈をなした『中辺分別論』は、安慧のサンスクリット復註が現存し、それに基づき世親釈を読解することが今日の唯識思想研究の主たる方法である。しかし安慧釈の写本は右側3分の1が欠損している上、『中辺分別論』に対するインド撰述の註釈書は安慧釈以外現存しないことから、『中辺分別論』の正確な読解にはチベット撰述の註釈が重要な役割を持つ。よって本研究は、『中辺分別論』の内容理解の一助となる当該写

本の読解を第一の目的とする。あわせて写本のデジタル撮影及び校訂テキストの作成を行い、両者をウェブ上に公開することを目指す。

本研究対象写本の体裁は、全55葉、縦11cm、横63cmの大きさで、『中辺分別論』の偈をウチェン書体の朱字で書き、世親による註釈をウチェン書体の黒字で書き記している。各葉の行数は1葉目が3行、2葉目以降は4行で書写されている。この写本の特徴は『中辺分別論』が記されている行間に、ウメー書体で細かな註釈がほどこされている点にある。註釈部のウメー書体は、ウメー書体の発展過程にある書体であり、敦煌出土チベット語文獻にみられる書体に近い。また当該写本と同様、行間に註釈をほどこしているスタイルをもつ写本はタボ寺発見のチベット語文獻の中にみられ (C. A. Scherrer-Schaub 'Towards a methodology for the study of old Tibetan manuscripts: Dunhuang', TABO STUDIES II, Manuscripts, Texts, Inscriptions, And The Arts. Roma: Is. I. A. O. 1999. 参照)、当該写本の価値も非常に高いことがわかる。このことから、写本本体を使用して研究することはできない。よって平成25年度は、対象写本のデジタル撮影を行った。ウメー書体が非常に微細であり複数枚の撮影は不可能であることから、一葉のみの撮影とし、全55葉の正確な画像データを作成した。これに伴い、ウチェン書体及びウメー書体の翻字作業を実施した。

平成26年度は、25年度に引き続き、当該写本文献の精密な読解による翻訳作業とテキスト作成に務め、それによって得られた成果を学会において口頭発表をし、論文投稿を行う。加えて、撮影した当該写本のデジタル画像、及び作成した翻字テキストのウェブ公開を実施する予定である。

個人研究

初期チベット論理学 成立史解明のための基礎研究

研究代表者・教授 福田 洋一
(仏教学)

現在、チベット僧院で伝承されているチベット論理学は、インドの仏教論理学をベースにしながら独自の発展を遂げたものである。その基礎は、10世紀以降のイ

ンド仏教後伝期から14世紀末にゲルク派が成立するまでの間、カダム派のサンブ僧院を中心に形成された。従来、この時期の文獻は失われたと考えられていたが、2002年にデブン寺で大量の写本が発見され、2006年以降『カダム全集』(ベルツェク研究所、現在90巻)として影印刊行された。その中に26点ほどの論理学書が含まれている。これらは、ゲルク派以降の論理学書とは様相の異なる極めて難解なものであり、刊行されて間のないこれらの文獻を十分に読解できるだけの研究の蓄積は未だ存在しない。本研究課題では、これら新出写本を元に電子テキストを作成し、そこから論理学的概念の用例および議論内容を比較検討することができるようなコンコーダンスを作成し、初期チベット論理学の形成過程を解明することを目的とする。

これら初期のチベット論理学書には『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』の注釈文獻が多い。最初のゴク・ロデンシェーラプ、チベット独自の論理学的表現を確立したチャパ・チューキセンゲ、カダム派後期のセンゲペルおよびチョンデンリクレルらの注釈書の中で、原典の語釈以外の発展的な議論の部分にチベット論理学の独自の発展の跡が見られるはずであり、これらの解読のためには議論内容の詳細目次である科段の抽出が欠かせない。これらも入力テキストに基づいて作成する。

『カダム全集』の中で論理学関係の著作は必ずしも多くはないとはいえ、それらは草書体で省略の多い文体で書かれているため、電子テキスト化するには多大の労力を要する。すでにいくつかの著作については個別に研究者が入力したデータもあり、本研究課題での入力テキストを提供することによって、相互に共有する方法を考えたい。ただし入力データそのものの公開は難しいので、それらを元に収集整理した概念の用例コンコーダンスや議論内容の対応表などをオンラインで公開することとしたい。難解なテキストを読解するためには、これらの基礎資料をもとに同じテーマの議論を比較検討することによって理解を深めることが有効であり、本研究課題の成果が個々のテキストを読解する際の基礎資料となると考えられる。

個人研究

移行期正義の社会的影響に関する
比較社会学的研究

研究代表者・准教授 阿部 利洋
(社会学)

体制転換あるいは紛争終結により民主化した社会は包括的な社会秩序の再建に取り組むことになる。その際に実施されるさまざまな制度・活動は移行期正義(Transitional Justice=TJ)と総称され、これまでアジア・アフリカ各地で多く行われてきた。一方、関連分野における近年の研究では「TJは常に失敗している」とする批判的な分析も増えている。政治学・法学を中心とする論者たちは、法廷運営の可否や制度改革の実態などからTJの評価を行い、社会秩序の再建を推し量ろうとするのである。それに対して、本研究では社会学的な視点から、TJの効果と影響に関する独自性を把握することを目指す。具体的には、社会運動論のアプローチを応用することから、民主化後のTJと社会秩序の再建に関して新たな理解を提示することを目的とする。

本研究のねらいは次の2点である。

- (1)1990年代以降、第三世界諸国で発展してきたTJのバリエーションを網羅的に整理し、その見取り図を提供する
- (2)社会学的な分析枠組み、とりわけ社会運動論の知見を応用することで、TJの問題点と効果・影響を、実態に即した形で描き出す

本研究の目的を達成するにあたり不可欠であるのが、現地調査を通じた一次資料の収集である。法学・政治学等他分野における先行研究との差異化は、「どのような活動が行われ、どういう反応を喚起し、どの社会問題と関連を持つか」といった点に関する具体的事例の提示によって行う。これにより、TJの公式目標とは異なる社会的効果・影響を実証的に議論できるようになる。現地調査を行う際の着眼点は、「TJ組織・活動が直面する外部要因との対立・葛藤・交渉」と「否定的環境のなかでの動員過程」である。こうして得られた事例を社会学的なフレームワークから整理し、より複雑で立体的な効果と影響の実態を描出する。複数社会を対象とするため、この作業は関連研究者との十分な意見交換を経て行い、現地研究者と共同での成果発表も積極

的に行う。

個人研究

保育カンファレンスが
保育者の「同僚性」に与える効果の
縦断的追跡研究

研究代表者・本学非常勤講師 黒澤 祐介
(社会福祉学)

これまでの保育カンファレンスの効果を評価した研究は、ヒアリングや参与観察を通じた質的な調査に留まっており、量的かつ実証的な研究は行われていない。また、保育に関する社会調査の多くは横断的調査であり、実施された調査に対する縦断的調査、追跡調査の割合は小さい。これは、縦断的調査、追跡調査を行うには多大な時間や費用がかかるだけでなく、個人IDを付与する必要上、個人情報保護のハードルが高く、実施が困難である為であることが予想される。しかし、縦断的追跡調査(パネル調査)を行うことでこそ、保育士一人ひとりへの影響、有効な保育カンファレンスや「同僚性」が形成される「過程」を明らかにすることができる。本研究ではA市公立保育所の保育士500名に個人IDを付与して、138項目からなるアンケートによって3年間にわたって縦断的追跡調査(パネル調査)を行う、主に下記2つの調査を行う。

- ①保育カンファレンスを実施した保育所(介入群)では非実施の他の保育所(対照群)と比較して、職場内の「同僚性」が有意に上昇するのかを実証的に解明する。
- ②保育カンファレンスを実験(介入)的に複数の形態で実施し、①でのアンケート調査の結果からの分析に加え、カンファレンス用の評価用紙を作成し調査を行い、有効な保育カンファレンスの「形態」や「進行方法」などの「方法論」を明らかにする。

上記、2つの結果から、有効な保育カンファレンスのモデル構築を最終目的とする。

研究①においては介入群である6つの保育カンファレンス実施保育所が、対照群である他の保育所に比べて、「同僚性」が高まっていくことを3年間の縦断的追跡調査から明らかにする。加えて、個人IDを付与した保育士一人ひとりが3年間どう変化をしていくかを追

跡し、年齢や受け持ちクラス等の外部条件、個人の性格や悩み等の内部条件を分析項目に加え、保育カンファレンスはどのような保育士に有効か（仮説として若い保育士により有効等）を実証的に明らかにする。

研究②においては、保育に適応した「同僚性」やカンファレンスの理論構築を行うとともに、実験的に複数形態での保育カンファレンスを実施し、質問紙も用いて質的および量的な両側面から、保育カンファレンスに適した「形態」や「進行方法」など「方法論」について明らかにする。

個人研究

古代中国文献に関する 表現形式に基づく評価基準の構築

研究代表者・本学非常勤講師 鈴木 達明
(中国文学)

近年、戦国時代から前漢初期にかけての中国研究は、大きな転機を迎えている。もともとこの時代は、前漢末の劉向・劉歆による大編纂事業以前のテキストを扱うため、文献学的な研究には限界があり、当時の学術状況については、近い時代に書かれた史書の記述や伝世文献の内容などから仮構されたモデルに基づいて議論を行わざるを得なかった。ところが、20世紀後半からの出土資料の相次ぐ発見によって、同時代資料による研究が可能となり、その結果、従来の学術モデルには、古代中国の実際の状況と齟齬する部分が多いことが明らかになってきた。

現在、出土資料を踏まえて、今後の議論の基礎となる古代中国の学術モデルを再構築することが急務となっている。本研究もその問題意識を共有するものであり、古代中国の文献に出現する表現形式に注目し、その発展段階・地域性・学派性を明らかにすることで、それに基づく学術モデルを構築し、当時のテキストの成立に関する新たな評価基準を提案することを目的とする。

本研究は歴史言語学に基づくテキスト分析を基礎とする。これは古代中国語の言語的变化に基づいて、各文献の先後関係や成立時期・地域を推定するという方法であり、その特徴は、テキストの外部に依拠しない客観性と精度の高さにある。これまで語彙のレベルで

用いられてきたその分析方法を、修辭を代表とする表現形式の分析に適用する。その意義は、単に分析する要素の拡充にとどまらない。先秦諸子に見られる様々な表現形式は、決して無意識に用いられたものではなく、思想内容や学派性と関連して、意識的に選び取られたものであった。ゆえに表現形式は、古代中国の思想や文化と結びつく知見を直接に引き出すことのできる要素であり、テキストの性質を判定する基準として使用することが十分に可能であると考えられる。

本研究が扱うのは先秦から前漢にかけての伝世文献と出土資料である。前者では諸子文献を中心として、関連性を持つ史書や方術書も含める。後者では対話文を含む歴史故事と技術文献を中心とする。それらの資料における(1)詩や賦でない散文において、押韻句を意識的に用いる表現、(2)対話文の中で、対話者の反応を描写する演说的な表現、(3)対話文の問いかけと応対に一定の句型を用いる表現、主にこの三種の表現形式について、その使用の実態を調査し、時期・地域・学派性など、想定される要因との関連性を考察する。その上で、相互の関係性や背景となる思想との関わりを明らかにすることを目指す。

個人研究

生業の域内多様度とその形成過程： 東南アジア大陸部における モン村落の事例比較

研究代表者・任期制助教 中井 信介
(文化人類学・人文地理学)

本研究では東南アジア大陸部において定住しつつある焼畑農耕民モン(Hmong)の事例から、彼らの生業の「域内多様度」とその形成過程を明らかにすることを目的としている。これは、生業からみた東南アジア環境史の構築に、人類学のアプローチから貢献するという筆者の長期課題における短期課題の1つである。

現在、世界の各国において経済発展や開発プロジェクトの進展にともなう社会の変化とともに、農山漁村の人々の生業は大きく変化しつつある。この変化は、東南アジアにおいてはとりわけ顕著かつ急速にみられる。そして現在進行中の社会変化と関連する生業変化を解明する研究が盛んに行われているが、これらの研究に

みられる近年の傾向に、生業の変化をできるだけ長期の時間経過のなかに位置づけて理解しようとする点が挙げられる。この傾向をもつ研究として近年注目されているのが、国内では環境史あるいは生態史とよばれる試みである。国外においては萌芽的なのが1960年代頃にあられ、1990年代には学会組織やジャーナルが整備されて研究が盛んになりつつある。いっぽう、国内においてはこのような研究に取り組む研究者はまだ少なく、人類学者、地理学者、歴史学者などが各自研究を行い、ときおり共同研究のかたちをとりながら研究が進められている。

上記の学術的背景において、筆者は生業の東南アジア環境史の構築に貢献することを長期課題として、農耕民の生業の仕組みとその変化の様相をフィールドワークにより収集した資料を主に用いて描く試みを行っている。筆者は2005年からタイ北部におけるフィールドワークを断続的に実施し、焼畑農耕が卓越してきた東南アジア大陸部の山地農村における約100年間の生業変化を、モンの事例から明らかにすることを研究の中期課題としている。

本研究は以上の中・長期課題の中で位置づけられる短期課題として、生業変化の一般性の検討を今後行うため、第一に現在みられるモンの生業の多様性の程度を、広い地理的範囲の中で確認する作業に焦点を置く基礎研究である。具体的にはタイ北部ナーン県のモン村落の事例を主に用いて、タイ国内の他県やラオス北部の広域事例をあわせて比較し、一定地域内に認められる生業の多様性の程度を、生業の「域内多様度」という概念を用いて理解して、その多様度の形成過程を検討する。

個人研究

9.11後戦争形成過程の 宗教社会学的研究

研究代表者・教授 飯田 剛史
(社会学)

現代において戦争は、民衆の愛国意識を「聖化」し、敵対グループのイメージを明確化し、それへの攻撃を正当化する世論ないし「集合意識」形成を経て決行される。「集合意識」は社会学者エミール・デュルケムの

主要な理論概念であり、本研究は、その現代的応用可能性を検証するものでもある。

本研究では、近年のアメリカの同時多発テロ事件を契機とするアフガニスタン戦争、イラク戦争をケースとして、政府およびマスコミ、宗教界を通してなされた「集合意識」の形成と方向づけのプロセスを解明する。

平常時には、大多数の人々が戦争に反対していても、異常な事態においては、不安と怒りの集合意識が形成され、それが政治とマスコミ、宗教集団のはたらきを媒介として戦争支持に方向づけられていく過程を解明する。

いわばこれは「戦争の作り方」の解明であるが、民衆的立場としては、これによって、政治、マスコミ、宗教集団によって操作されない方法を求めるための基礎認識となると考えられる。すなわち戦争の作り方の宗教社会学解明を通して「戦争の防ぎ方」を見出そうとするものである。

個人研究

低酸素環境下登坂歩行運動における 登山熟練者呼吸スキルの解明

研究代表者・准教授 井上 摩紀
(体育学)

近年、日本では登山ブームである。2013年には富士山の世界遺産登録や史上最高齢80歳でのエベレスト登頂を果たした三浦雄一郎氏の活躍などで登山が注目を浴びたことが契機となって、高地登山への関心はさらに強まった。初心者や初級者までもが、富士山など国内標高3000m級への登山や、さらなる高みを目指して海外トレッキング・登山に参加している現状がある。しかし、高地では空気中の酸素濃度が地表と比べて低く、血中酸素濃度が低下する。この低酸素状態が登山者の活動レベルを下げ、時には高山病を引き起こす。

これまでの高地登山技術では歩行中の低酸素状態を改善する方法として、「ゆっくりと腹式呼吸で」と言われてきた。無意識に行われる呼吸のままでは低酸素環境では十分に酸素を摂取出来ない。確かに、腹式呼吸は意識的な呼吸となり、深い呼吸が可能となる。しかし、筆者は自身の登山経験と、呼吸が運動と密接に関

わるヨガにおいて腹式呼吸と同様に胸式の呼吸が重視されていることから、長年言われている「腹式呼吸」よりも低酸素状態の改善には「胸郭を開くことを意識したゆっくりとした胸式呼吸」がより有効ではないかと仮説を立てた。

本研究に先んじて行ったエベレスト登山経験を持つ70歳代の登山熟練者を被験者とした実験では、歩行運動時の呼吸を胸部と腹部に分離して計測した。その結果、酸素濃度15%（高度3000m相当）の斜面での歩行運動時には、登山熟練者は腹式呼吸よりもむしろ胸式呼吸を用いており、さらに歩行運動のリズムに合わせ、時間をかけて胸郭を拡張させて吸う特徴があるという結果が得られた。この実験については「常圧低酸素環境下における登坂歩行運動時の呼吸リズム—登山熟練者を対象として—」と題して高齢熟練登山者のセルフペース登坂歩行時の呼吸運動と歩行運動との関連を比較した発表を行った（日本体育学会第64回大会）。

本研究では、登山熟練者を対象とした実験室内に設けた低酸素環境でのさらなる実験を行うことで、呼吸の仕方を含む熟練者が持つ低酸素状態の改善に役立つ効率のよい身の処し方の特徴を明らかにし、その熟練者が長年の経験の中で習得した高地登山時に効率の良い呼吸スキルのメカニズム解明を目指すことを目的とする。加えて、呼吸スキルの効用について高地での実地調査を行い、呼吸方法の訓練効果の検証を行うことを目的とする。

海外学会報告

エトヴェシ・ロラード大学（ブダペスト）における 国際仏教シンポジウム報告

国際仏教研究 研究代表者・准教授 井上 尚実

2013年10月26日(土)と27日(日)の2日間、ハンガリーのエトヴェシ・ロラード大学 (ELTE) において、ELTE 東アジア研究所と大谷大学真宗総合研究所共催の国際シンポジウム “Faith in Buddhism” (仏教における信) が開催された。ELTE と大谷大学は2007年の学術交流協定締結以来、本学の教員が ELTE において日本仏教に関する集中講義を行い、ELTE の教員が大谷大学で公開講演を行うなどの交流を続けてきたが、2011年からは合同シンポジウム開催を計画して準備を進め、今回の ELTE における国際シンポジウムがその第1回目にあたる。国際仏教研究英米班から、筆者とマイケル・コンウェイ嘱託研究員に加えて、特別派遣者として真宗学科の藤嶽明信教授、仏教学科のロバート・ローズ教授 (教育・学生支援担当副学長)、織田頭祐教授の5名が出席した。さらに公募によって選ばれた博士後期課程学生2名 (仏教文化 D2 李曼寧・仏教学 D1 竹林遊) も同行し、ELTE 側の参加者・研究者と学術交流を行った。以下はその報告である。

ブダペスト到着翌日の10月25日(金)、ローズ教授 (教育・学生支援担当副学長) と筆者は、ELTE 側で今回のシンポジウム運営の中心を担った日本学科の山地征典教授の案内で在ハンガリー日本大使館に山本忠通特命全権大使を表敬訪問した。約1時間、山本大使と今回のシンポジウムのことを中心に仏教学の分野におけるハンガリー (ELTE) と日本 (大谷大学) の学術交流の現状と展望についてお話することができた。

シンポジウム初日26日(土)は、午前10時から開会式が行われた。マリア・テレジアの肖像が掲げられた文学部大会議室において、ELTE 東アジア研究所長ハマル・イムレ教授、ELTE 国際交流担当副学長エルデューディ・ガール教授、山本忠通ハンガリー大使から歓迎の言葉があり、木村清孝教授 (鶴見大学学長) による “Meaning and Perspective of the Buddhist Studies—With Special Reference to Faith” (仏教学の意味と視座—特に信に関して) と題された基調講演によって研究発表が始まった。初日の発表者は7名で、大谷大学からは織田頭祐教授が “The Concept of ‘Faith’ in the *Discourse on the Awakening of Mahayana Faith*” (大乘起信論における信の概念) に

ついて発表した。午後5時過ぎに初日の発表が終わり、6時からはキャンパスに隣接する XO レストランに会場を移して「シンポジウム」(ギリシア語源: *sym* 一緒に *-po* 飲む *-sion* こと) を継続し、和やかな雰囲気の中で学術交流を深めることができた。

二日目の27日(日)は午前10時から9名の発表があった。日本からの発表者と題目 (和訳) は以下の通り。

井上尚実 “Genealogy of Other-Power Faith: From Śākyamuni to Shinran” (他力の信の系譜: 釈尊から親鸞まで)

ロバート・F・ローズ “Faith and Practice in Genshin’s *Ōjōyōshū*” (源信の往生要集における信と行)

木村清孝 “Faith and Enlightenment in Dogen’s Thought: As a Result in the Descent of Chan/Zen Buddhism” (道元の思想における信と悟り: 禅の系譜における帰結として)

藤嶽明信 “The Faith Elucidated by Shinran: The Faith of Amida’s Directing of Virtue” (親鸞が明らかにした信心—如来回向の信心—)

マイケル・コンウェイ “Dharmākara as the Subject, Not Object of Faith: The Reinterpretation of Amida’s Causal Phase in Modern Shin Thought” (信の対象ではなく主体としての法蔵菩薩: 近代真宗教学における阿弥陀因位の再解釈)

シンポジウムにおける発表論文は事前にコピー製本され、119ページの論文集として会場で配布された。国際シンポジウムとして運営されたので、発表および質疑応答はすべて英語で行なわれた (織田教授と藤嶽教授の発表論文は事前に英訳され、それに対する質疑応答はマイケル・コンウェイ嘱託研究員が通訳を務めた)。二日目は中国と日本の仏教における「信」をテーマにした発表が中心で活発な議論が交わされ、予定した終了時間を30分ほど延長して午後6時過ぎに終了となった。引き続き二日間のシンポジウムの総括と今後の展望について、ハマル教授、木村教授、ローズ教授がまとめの討論を行

い、大谷大学側を代表したローズ副学長の閉会の辞によってシンポジウムが閉じられた。会場を移した「さよならパーティー」はシンポジウムの成功を祝して午後9時過ぎまで続いた。

翌28日(月)午前11時から、ELTE 文学部B棟一階に新たに設置された Budapest Centre for Buddhist Studies (ブダペスト仏教学センター)の開所式が行なわれ、大谷大学からの一行は全員セレモニーに参列し、ローズ副学長が祝辞を贈った。真新しいセンター内の書架には、真宗大谷派と大谷大学から ELTE に寄贈された坂東本『教行信証』カラー影印本とその翻刻本のセットが大切に収蔵されていた。祝賀パーティーの後、ハマル教授の

案内でキャンパス内の東アジア関係の研究室と図書館を見学し、午後3時にはハマル教授のオフィスでお茶を御馳走になった。そこでは次回シンポジウムの計画についても話題になった。今回の発表論文集を ELTE 東アジア研究所から学術書として2014年に出版し、2016年度を目処になるべく早い時期に大谷大学で第2回を開催できたらという合意があった。

一週間の海外出張はかなりタイトなスケジュールであったが、天候にも恵まれ充実していた。大谷大学から参加した発表者5名と同行した学生2名は、ELTE の研究者とアカデミックな交流を重ねることができ、有意義な国際シンポジウムであった。

国際シンポジウム「仏教における信」に参加して

博士後期課程 仏教文化専攻D3 李 曼寧

私が国際シンポジウム「仏教における信 (Faith in Buddhism)」への参加を志望した理由は、今回の国際シンポジウムのテーマが私の研究テーマと関連があったからである。

私は鴨長明の『発心集』を中心に、中世の仏教説話集を研究テーマとしている。仏教説話集という特殊な文学形式を研究するには、理論の面でも背景の面でも仏教についての知識が欠かせない。また、日本の仏教文学を勉強している中国人留学生として、世界中の外国文化研究をしている学者と交流する機会ができることも、とても魅力的であった。

今回の国際シンポジウム参加を通して、私自身の収穫を言えば、主に二つを挙げることができる。一つは専門知識を深めることができたことである。今回のシンポジウムは、仏教に関してこれまでしばしば論じられてきた「信」という概念をめぐる、インドの原始仏教・中国仏教・日本仏教・チベット仏教等に関する幅広い研究領域を網羅していた。そのなかにおいて、特に鴨長明に深く影響を与えた源信の『往生要集』と、長明と同時代の親鸞の思想に関する研究発表を拝聴し、自分の研究に参考になった。

もう一つの収穫は、研究者として国際的な能力技術の重要性を新たに認識したことである。これはまた二つの面に分けられる。一つは言語理解の問題である。異なった言語の間には、特に専門用語について、原文と訳文との間に一対一の対応があるとは限らない。例えば、今回のシンポジウムの主題について、「信」と「faith」の意味は完全に一致するとは言えない。もう一つはコミュニケーションの道具としての言語力の問題である。国際化が進んでいる現代において、より幅広く学術交流をするためには英語力の強化をしなければならない。今回のシンポジウムにおいて、私が関心を寄せた道元に関する発表について大胆に質問してみたが、自分の英語会話力の不足により、日本語の質問を英語に通訳してもらわなければならなかった。今後は、自分自身の研究に専念するだけでなく、英語のトレーニングも日々の学びの中に加えるべきだと考えるようになった。

今回の国際シンポジウム参加を通して、仏教知識の増加や知的な啓発などを受けた一方、新しい目標を見つけることができ、今後の研究・学術交流のためにはとても良い経験であったと思う。

国際シンポジウムに参加して

博士後期課程 仏教学専攻D2 竹林 遊

真宗総合研究所・国際仏教研究班とハンガリー・エトヴェシ・ロラード大学（以下 ELTE）東アジア研究所の共同開催国際シンポジウム「仏教における信」が2013年10月26日・27日、ELTEを会場として開催された。それに合わせて10月24日～30日までのハンガリーへの出張旅程が生まれ、博士課程学生同行者の公募があった。筆者は、シンポジウムのプログラムに目を通して内容に関心のある発表がいくつかあったことと、ELTEの大学院生と学術的な交流を持てることを期待して応募し、面接選考の結果、同行させていただくことになった。

基本的にシンポジウムの発表・質疑は英語で進められた。結果的に言えば、筆者の勉強不足で、英語の発表や質疑のやり取りについて行けず、質疑のところで発言することも出来なかった。個人的には消極的な参加に終わってしまったことを反省している。また、当初より関心を寄せていた二つの発表が、やむを得ない事情のためキャンセルになった。どちらも中国仏教関係の発表であったため残念に思う。

シンポジウムに参加していたELTE側の大学院生は予想したより少なかったが、そのうちの数名にどのような研究をしているのか尋ねることができた。彼女たちの研究テーマは、例えば日本の家庭にある仏壇についての研究、近代中国仏教者の太虚（1890-1947）についての研究、語彙的な側面からの『華嚴經』研究、『肇論』の宋代注釈書の英訳研究などであった。ELTEの博士課程学生は、主に仏教や仏典についてその社会的側面、歴史的側面、あるいは言語的側面から研究を進めている。ELTEでは、バリエーション豊かな切り口から仏教や仏典が研究されていることが窺えた。しかしながら、思想的側面からの仏教研究は主流ではないように見受けられた。ここに大谷大学ひいては日本の仏教研究との違いを見ることができたように思う。いずれの側面からでも仏教を研究するには変わらないのだが、思想以外の側面からの研究について、その目的と方法を知ることができ、個人的には新鮮に感じた。



シンポジウム開会式



ブダペスト仏教学センター開所式

海外研究調査報告

タイ王国第一級王室寺院ワット・プラチエートウポン (通称ワット・ポー) 所蔵の貝葉写本に関する共同研究

西藏文献研究 嘱託研究員 清水 洋平

大谷大学には、今から百年余り前のタイ王室寄贈を機縁としたパーリ語貝葉写本(〈大谷貝葉〉と略称)が所蔵されている。その所蔵数は国内最大級であり、内外に誇る一大コレクションである。大谷大学真宗総合研究所「指定研究」西藏文献研究では、大谷貝葉について、今までに稀観文献と判明しているものを中心にデジタル画像データ化の作業を進めてきた。それと同時に、タイ国における現地調査も実施しながら、大谷貝葉における稀観文献の抽出作業を行ってきた。現在、同作業の進展により、新たな稀観文献の存在も明らかになり、国内外から注目を集めている。

そのような状況のなか、マハーチュラーロンコーン大学大学院研究科長でワット・ポーの Phra Suthithammanuwat (Ven. Dr. Thiab Malai) 長老から、バンコク所在の第一級王室寺院ワット・プラチエートウポン(通称ワット・ポー)が所蔵する貝葉写本についての共同研究の調査許可が得られた。ラーマ1世に所縁の深い同寺院は、王室寺院の中でも格式が高く、現在に至るまで学問寺としても有名である。同寺院が所蔵する貝葉写本は、「タイ王室版」の一つとして知られ大切に保管されており、写本調査の許可が認められることは今まで殆どなかったのである。

よって、「タイ王室版」の一つとされる同寺院所蔵の貝葉写本についての共同調査、資料収集が実施できる今回の調査は、稀観文献の抽出作業を進める我々にとって非常に得難い機会であり、大谷貝葉と「タイ王室版」との比較研究が可能になることから大変意義深いものである。

- ・3月16日(日): 午前、関西国際空港から出国し、現地時間15時45分、スワンナプーム国際空港に到着。その後ホテルに移動。
- ・3月17日(月): 上記した Ven. Dr. Thiab Malai 長老と大谷貝葉コレクションについての意見交換並びに調査の事前準備、打ち合わせ。その後、ワット・ポーが所蔵する写本の多くが収蔵されている僧房エリア側の寺院図書館にお連れ頂き、同館の管理責任者である Phramaha Udom Panyapho 長

老、並びにワット・ポーと共同で写本のデジタル化を進めている Dhammachai International Research Institute (DIRI) の Ms. Niramol Prompetchra 氏との調査の打ち合わせを行う。(尚、21日までの全行程において、大谷大学で博士号を取得された舟橋智哉氏、Dr. Bunchird Chaowarithreonglith 氏からの御助力を頂いた)。

- ・3月18日(火)~3月21日(金): 調査・撮影作業を実施。
- ・3月22日(土): 午前、スワンナプーム国際空港より出発。18時10分、関西国際空港に到着。

ワット・ポーにおける今回の共同研究調査において、調査・写真撮影を実施した主な文献名を以下に記す(左から収蔵番号、写本に記された文献名、phūk(束)数)。

- ・3/97: Visuddhajanavilāsini aṭṭhakathā apadāna (16 phūk)
- ・3/98: Visuddhajanavilāsini aṭṭhakathā apadāna (15 phūk)
- ・4/113: Buddhagaṇa peela (4 phūk)
- ・4/125: Sammohaniḍāna (12 phūk)
- ・4/145: Dasavatthukathā (6 phūk)
- ・4/151: Sabbadānānisamsakathā (20 phūk) など。

これらの文献は、大谷貝葉に含まれているもの、もしくは関係が深いと考えられるものである。今後は、これらのデジタル画像資料を利用しながら大谷貝葉との比較研究を中心とした作業を行い、具体的な関連性を検討していく。

その他、同寺院に所蔵されていた貝葉写本の多くは、一定のデザインが施された絹製の布によって包まれていることを確認した。この点について、他の寺院に所蔵されている貝葉写本には、ワット・ポー所蔵の貝葉写本に用いられている布と同様のものは殆ど見られないのであるが、大谷貝葉を包んでいた幾つかの布の中には、これと同様の布が見られるのである。大谷貝葉については、その出自が「今から百年余り前、タイ王室寄贈」としか判明していないことから、このことは、大谷貝葉の出自を明らかにしていく上で有益な情報で

ある。

今回の調査は、かなりの時間的制約があったことも含め当初予定していた4/132: Paṭipattisaṅgha (5 phūk)、4/155: Candasenajātaka (1 phūk)、Nandarājajātaka (1 phūk)、Rathasenajātaka (2 phūk)、Varavaṃsakumārajātaka (1 phūk)、Sirisāracakkavattijātaka (2 phūk) などの写本文献についての調査・写真撮影を行うことができなかった。これらの写本文献については、ワット・ポーと協力関係が築かれている現在、出来る限り早く再訪して、引き続き調査・写真撮影を実施したい。



ワット・ポーの僧房エリア側の寺院図書館

学術交流協定に基づく共同研究①

中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく共同研究、及び公開研究会開催について

国際仏教研究（東アジア班）研究員・准教授 松浦 典弘

本学真宗総合研究所と中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定が締結され、早いもので4年経った。本年度も相互に研究者が訪問の上、共同研究を行い、有意義な成果を上げることができた。

まず、中国社会科学院歴史研究所からは、12月3日～9日の日程で、王震中研究員（歴史研究所副所長）と関樹東副研究員を招聘した。先生方は3日に到着後、早速、草野顕之学長を表敬訪問され、懇談が行われた。当日夜は浅見直一郎真宗総合研究所長主催の歓迎会が開かれ、今後の交流のあり方などについて意見交換を行うと共に、和やかな雰囲気のもと、相互の親睦を深めた。

ついで、6日13時より公開講演会が開催された。王先生は「中国の国家の起源と発展についての研究の最新進展」と題してお話された。『中国古代国家の起源と王権の形成（中国古代国家の起源と王権の形成）』などの著書があり、中国古代史研究の第一人者である先生は、日本への留学経験もあり、日本の事情にも通じておられる方である。国家起源の理論について述べられた後、遺跡や遺物の映像を交えながら、最新の研究状況に関して、詳しく紹介していただいた。一方、関先生は「耶律和魯斡、耶律淳父子と遼東の政治」と題してお話された。契丹（遼）の研究は、日中双方で盛んになりつつあるが、文物史料を映像で紹介しつつ、現在の研究状況について分かりやすく解説された。両先生の御講演で最新の研究状況に触れることができ、大変意義深い時間となった。

先生方は、研究活動の合間には、京都観光も楽しまれた。東本願寺を訪れた後、金閣寺・龍安寺と回られ、さらに嵐山を散策された。12月に入ったとはいえ、穏やかな天候に恵まれ、慌しくご多忙な日程の中、しばし休息のひと時を過ごされた。

一方、本学からは、3月3日～6日の日程で、福島重非常勤講師と今西智久任期制助教が、中国社会科学院

歴史研究所を訪問し、共同研究を行った。

両名は4日には隋唐宋元明代史研究室主任の黄正建先生と会談の後、福島講師が「関于奴兒干永寧寺的設置和意義—以14～15世紀中国東北仏教史的究明為目標」、今西助教が「関于中国中古の沙門觀及沙門致拜君親—隋煬帝期的礼敬問題為主」のテーマで研究報告を行った。

報告後は、先に本学を訪問された王震中先生の主催で、昼食会が開催された。隋唐宋元明代史研究室のメンバーが出席し、福島講師と今西助教の報告に対するコメントや今後の交流についての意見交換が行われた。

その後、同研究室の劉曉研究員・陳麗萍副研究員・張国旺助理研究員と、近年の日中における研究動向や若手研究者を取り巻く状況についての情報交換を行った。三氏は何れも過去に本学を訪問しており、久々に旧交を温めつつ、忌憚のない意見が交わされた。

5日は、中外関係史研究室のオウンゴア副研究員の案内のもと、八大処公園内にある七か所の寺院（八寺中、一時は非公開）の調査を行った。それぞれが歴史や伝説を持つ寺院であり、景勝地としても知られている。当地においては、主に現代中国における仏教信仰の姿を確認することができた。

調査後はオウンゴア氏と懇談、現在の中国事情や研究の流行について話をした。オウンゴア氏は何度も日本を訪れておられ、交流協定の締結当時から関わってこられた方である。

今回は若手研究者2名を派遣したが、充実した共同研究となり、今後の発展へとつながることが期待される。

交流協定は5年の期限で締結されており、いよいよ締めくくりに入る。双方の希望により、さらに延長される可能性が高いものと思われるが、今後、国際シンポジウムや報告書の出版など具体的な成果につなげていくことができるような1年にすることを期したい。

学術交流協定に基く共同研究②

ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との 共同研究について

国際仏教研究 研究員・教授 織田 顕祐

昨年12月25日に、本学真宗総合研究所とベトナム社会主義共和国のベトナム社会科学アカデミー宗教研究院(以下ベトナム宗教研究院と略す)との間に「学術交流に関する協定書」が交わされ、本年度から本格的に両機関の間で研究交流が始まることとなった。そこで、この共同研究実施についての背景と意義についてまとめておきたい。

初めに本共同研究実施に至る背景について簡単に触れる。本学大学院仏教学専攻には以前から、数名のベトナム人留学生が在籍していた。加えてごく最近文学部にも留学生が入学してきた。当該学生たちはいずれも出家の僧侶で、留学生を送り出す母国の事情についてよく知る必要があると考え、2012年3月9日～15日の日程で、仏教学科箕浦准教授と教育研究支援課国際交流担当瀧上氏の三人で、ベトナムにおける仏教学の教育・研究現場を視察した。この視察は、ベトナム宗教研究院の客員研究員である大西和彦氏の全面的なコーディネートと協力によって実現した。何しろ、日本ではベトナムは古くからの仏教国であるという点と戦争で国土が荒廃したが最近復興しつつあるということだけが知られていて、その内実についてはほとんど知られていないというのが偽らざる現状だからである。大西氏は1984年に本学大学院博士後期課程(東洋学を専攻)を満期退学し、単身ベトナムにわたって、ベトナムの道教並びに民間信仰の研究を独力で進めていたのである。我々は視察すべき場所さえ分からない状況だったので、「ベトナムの大学における仏教研究と教育の現状が知りたい」という点を軸として、訪問先は大西氏と彼に関係あるベトナム側の方々にすべてお任せした。その結果、ハノイ市に在るベトナム宗教研究院、ハノイ仏学院、ホーチミン市のホーチミン仏学院の視察が実現した。もともとベトナムは北部地域と南部地域の二つの文化圏から成るのであるが、現在では統一されて政治はハノイ、経済はホーチミンといった機能の違いがある。それ故、仏教界も南北異なる歴史と伝統をもっているのであるが、社会主義国であるベトナムの仏教界は、1981年以来政治的には北部のベトナム仏教協会に統一された。そのベトナム仏教協会のもとに、全ベトナムの仏教寺院とベトナム人僧侶の教育と研究を

担う高等教育機関として仏教研究院=仏教大学(日本式に言えば、仏教専修学校に相当するか)が四校設置されているのである。

一方、ベトナム宗教研究院は、国に直属するベトナム社会科学アカデミーの41ある研究院のうちの一つで、ベトナムにおける宗教政策の基本を政府に答申するためのシンクタンクのような機能を持った研究組織である。同院は五つの専門領域から成り、①仏教研究室、②キリスト教研究室、③伝統宗教研究室、④外国宗教研究室、⑤宗教理論・宗教社会学研究室の五である。①～③は国内を対象にしており、多民族・多宗教のベトナムの現状を踏まえたものである。目下のところはベトナム各民族の信仰の分析・解明に専心し、心靈現象の科学的研究を進めようとしている。研究以外に、年12回の博士論文の審査(申請者は主に僧職)と、雑誌『宗教研究』の編集、過去に100冊以上の単著を出版し、諸外国との交流も実施している。仏教研究の概要としては、①時代(特に1920年代から現代)を設定して、仏教の現代化、ベトナム仏教の人物の研究などを中心に実施。②ベトナム仏教協会と協力して、人物の研究、信仰の表現方法を研究し、仏教教育の基盤となっている。③ベトナムでは北宗(中国系の大乗仏教、金剛座仏教と呼んでいるとのこと)と南宗(南方上座部仏教)を合わせて僧尼の教育方針としており、中国やミャンマーの仏教より優れている(大乗と小乗を融合しているという意味)と考えているとのことである。グエン・クオック・トゥアン院長は就任したばかりで、仏教研究について日本が先進していることは承知しており、ベトナムでは欧米人の著作を通してしか日本のことが学べず、直接学べないので内容の真偽に疑問をもっていることなどをしきりに訴えておられた。

ハノイ仏学院は、ハノイの中心部からおよそ車で1時間半ほど離れた郡部に在り、山中の古い静かな修道院といった様相である。学生・教職員約500名が寄宿舎生活をしており、四年ごとの入学ということである。学院長タイン・ダット先生の話では、仏学院は内典・外典に通暁することを教育の目標としているが、①各学院によって教科書が決まっていない、②翻訳された参考書がない、③特に中国語・日本語のものは全く学ぶことがで

きない、といった問題点を抱えているとのことであった。教科書・図書館等の拝見を申し出たが担当者不在を理由に断られた。

ホーチミン仏学院は、ホーチミン市の中心に在り、規模・内容ともにハノイ仏学院とはまるで異なっている。1984年に最初の卒業生を出して以来ほぼ30年間運営され、現在3,000名の学生を有し、これまでに100名が博士の学位を取得したとのこと。入学は、隔年で1学年が1500人である。学生は近郊の所属寺から各自通学している。現在郊外に新校舎を計画中で、各学年200人が大学院に入る予定。仏学院でない総合大学を目指し2万人規模を考えているそうである。学生の留学先は、主にインド、台湾、アメリカ、日本などである。4つある仏学院で修士課程をもっているのはホーチミンだけであり、外国（旧ソ連、モンゴル、ラオスなど）からの留学希望があるが、まだ受け入れ基盤が不十分であるとのこと。ここでは教科書・図書室を拝見することができたが、体系的・組織的に考えられたものではなかった。

この視察をきっかけとして、2013年6月のベトナム宗教研究院グエン・クオック・トゥアン院長の本学表敬訪問、同年9月のチュー・ヴァン・トゥアン副院長の本学来訪と共同研究の内容に関する懇談を経て、12月の「学術交流に関する協定書」の締結に至ったのである。同協定は研究者・学生の交流やシンポジウムの共催、学術刊行物の交換や共同研究の推進等を約束する包括的なもので、具体的な交流については別に覚書を交わすことになっている。本学の施設と研究教育内容を目の当たりにしたベトナム宗教研究院側は、今後のベトナムにおける仏教研究・教育の発展のために本学のノウハウを活用したいと考えたのである。

次にこの共同研究の意義について一言しておきたい。この協定書の締結を受けて、2014年度からの具体的交流に関する覚書をまとめるため、2014年3月6日～10日の間、箕浦研究員と共にベトナム宗教研究院を訪問した。主にベトナム側からの提案である『越日仏教辞典』の内容に関する問題、12月の「協定書」締結時に視察し、課題提起されたベトナム北部寺院に所蔵される仏典版木に関する学術研究の意義等について懇談するため

ある。『越日仏教辞典』は、学術的な基準が明確でないまま様々におこなわれているベトナムにおける現状の恣意的な仏教研究に関して、一定の基準を提供しようというものである。また北部地域に所蔵される版木とは、バクザン省ビンギエム寺（永厳寺）等に保管される柿板に彫琢された3千枚余の仏典の版木に関する研究である。実際にビンギエム寺を視察したが、この地域には紀元前後頃にはすでに仏教が伝来していたとの伝説が残っており、かりにこの伝説によるならば、仏教が中国に伝来した時期とさほど変わらず、日本の仏教伝来よりもはるか昔のことである。事実であれば、ベトナムの地理的な位置から見て大乘仏教展開以前の上座部系の仏教が伝来したと考えられる。その後、さらに中国経由で大乘仏教が重なり、東シナ海の東のはずれにある日本とは対照的な仏教受容の歴史があったはずである。こうした点は、これまでのアジア仏教思想史ではほとんど問題になってこなかった点であり、アジアにおける仏教の伝播・展開に新しい視点を開く可能性がある。版木の問題も含めて今後これまでの研究成果を収集しつつ検討を重ねることは、日本仏教の意味と質を反照するきっかけになると思われる。また、『越日仏教辞典』は内容について今後大いに議論していかねばならないが、この課題を進めていくためには、我々がこれまで積み重ねてきたものを要約して再表現する必要が生ずる。このような課題は、すでに既成の辞書の記述などが外国語のように感じられる現代の日本の学生に対して、新たな工具書を提供できる可能性を秘めているように思う。つまりこの共同研究は、日本側が一方向的にベトナム側を支援するという以上の可能性を持っているのである。

このような大きな課題を見すえた上で、直近の課題として、可及的速やかにお互いの仏教の概要を理解し合うべきであるとの観点から、日本語で読める「ベトナム仏教概説」、ベトナム語で読める「日本仏教概説」（いずれも仮称）を編集することとした。この共同研究の真の実現には多大な時間と労力が必要であると考えられるが、ぜひとも本学が腰を据えて取り組むべき課題であると考えている。

国内学会報告

第61回日本チベット学会大会に参加して

西藏文献研究 研究代表者・教授 福田 洋一

第61回日本チベット学会大会が、2013年11月16日(土)、17日(日)の二日間にわたって高野山大学で開催された。真宗総合研究所西藏文献研究班からは、研究員福田洋一・三宅伸一郎、嘱託研究員伴真一郎、研究補助員稲葉維摩、金建峻の5名が参加した。例年、土曜日の午後みの開催であったが、交通の便を考慮して一泊二日の学会開催となった。また日曜日の午後には、神戸外国語大学研究員の岩尾一史氏が呼びかけ人となって第一回チベット情報交換会が開催された。発表内容は、近年のチベット学の傾向を反映して、仏教のみならず、歴史、人類学、言語学、宗教学、文学など極めて広範な内容のものであった。発表者の多くは、大学院博士課程の在學生や研究員、非常勤講師、助教など、若手であった。また発表者の中にチベット人留學生が二人いたこと、そして多くのチベット人留學生が参加していたことも特筆すべきことである。

発表は、初日16日には仏教学関係、二日目17日の午前中はそれ以外分野、17日午後には情報交換会として研究報告が行われた。プログラムは以下の通りである。

11月16日(土)14時30分～

1. 「『入阿毘達磨論』の原題に関する考察：蔵訳仏典が伝える書名中の“rab tu byed pa” (prakaraṇa) の意味をめぐって」(横山 剛・京都大学大学院)
2. 「Prajñāpradīpa-tīkāの書誌学的考察」(西山 亮・龍谷大学アジア仏教文化研究センター)
3. 「『ガリム』第14章における脈・風・滴・輪の特色について」(石部道明・高野山大学密教文化研究所)
4. 「ツォンカパの二諦説における世俗と世俗諦の関係について」(古角武陸・仏教大学大学院)
5. 「『サムスクチェンモ』における「軽安」」(青原彰子・広島大学大学院)
6. 「Kaḥ-thog dGertse Mahāpaṇḍitaの大中観他空説について」(横殿伴子・身延山大学東洋文化研究所)

11月17日(日)9時～

1. 「チベット語アムド農民方言の音韻体系とその特徴」(ダムデインジョマ・神戸市外国語大学)
2. 「チベット文遺詔・登極詔の頒布のあり方からみる清朝―チベット関係の側面」(岩田啓介・筑波大学大学院)

3. 「チベットアムド地域におけるルコ祭とその社会的意義について：ウォッコル村の事例から」(チョルテンジャブ・総合研究大学院大学)
4. 「マチク直伝のチュウの研究：初期文献の特定とギャルトン流の実践形態の参与観察」(佐藤剛裕・明治大学野生の科学研究所、ゾクチェン研究所)
5. 「ボン教の実践にみる普遍性と地域性：アムド、シャルコク地方の事例から」(小西賢吾・日本学術振興会特別研究員／大谷大学)
6. 「戦時期日本におけるチベット仏教関連画像資料」(高本康子・北海道大学スラブ研究センター)
7. 「小説家の描く現代チベット：アムド出身の二人の作家、タクブンジャとペマ・ツェテン」(海老原志穂・日本学術振興会特別研究員／東京外国語大学、星 泉・東京外国語大学)

17日午後からの、若手研究者の情報交換会の報告内容は、次の通りである。

1. 「音楽から難民社会を見ろということ、あるいはチベット関係サブカルチャー理解の脱構築」(山本達也・京都大学)
2. 「私のチベット研究―回顧と展望」(安田章紀・京都女子大学)
3. 「今、チベット映画が熱い！」(星 泉)
4. 「チベット語方言の調査研究の中間報告」(海老原志穂)
5. 「チベットアムド地域の開発や環境と文化との関係」(別所裕介・広島大学)

二日間を通しての発表および報告は総数で18と、これまでの日本チベット学会史上、最多を記録した。6日午後の仏教学関係の発表は、伝統的な文献学に立脚し、パワーポイントを使うこともなく配布資料もみなフルペーパーであった。対して17日の発表は、言語学、歴史学、文化人類学、文学と様々な分野にわたり、7つのうちの5つの発表がパワーポイントを使用していた。発表形式の違いは、学問の方法論の違いに根ざすものである。同時に、それぞれの学問分野の成熟の度合いを示しているようにも見えた。今後ますます研究領域の広がりを見せるであろうチベット学の新鮮で若い息吹が感じられる二日間であった。

公開研究会(講演会)・共同研究会報告①

ツルティム・テンジン師講演 「ボン教聖地の現状について」

西藏文献研究 前研究員・准教授 三宅伸一郎

12月19日(木)16時30分より、ネパールにあるボン教僧院ティテン・ノルブツェの瞑想学堂堂長ツルティム・テンジン師を講師にお迎えし、響流館3F演習室3にて「ボン教聖地の現状について」のテーマのもと公開講演会をおこなった。ツルティム・テンジン師を講師にお迎えした公開講演会は2009年に続き2回目である。講演はチベット語でおこなわれ、通訳はおもに三宅が担当したが、同僧院での修行歴のある脇嶋孝彦氏にもお越しいただき、逐次補足していただいた。

以下本講演会の概要を、当日配布された資料にもとづき示す。

1) ボン教の聖山とボン教の歴史

ボン教開祖トンバ・シェンラブ (sTon pa gShen rab) の生涯

2) ボン教の二大聖地

A. カイラス山

- ・ボン教最高の聖地。仏教、ヒンドゥー教の聖地でもある。
- ・ボン教開祖トンバ・シェンラブの生誕地タジク・オルモルンリン (sTag gzig 'Ol mo lung rings) の中心にあるのがこの山だとされる。ボン教の本尊ワルチェン・ゲコー (dBal chen ge khod) そのものだとされる。カイラス山の付近にある湖マパン・ユムツォ (Ma pham g.yu mtsho) / マパン・ユムツォ (Ma pang g.yu mtsho) もボン教の聖地であり、ワルチェン・ゲコーの妻が住んでいるとされる。
- ・タジク・オルモルンリンは常人には見るのできない、高度な修行を成就した人のみが見る事のできる浄土であるともいわれるが、8世紀~14世紀までの古い文献にこの国の実在を示す記述がある。
- ・カイラス山の付近にはボン教が栄えたシャンシュン (Zhang zhung) 国の都キュンルン・グルカル (Khyung lung dngul mkhar) があり、そこにはトンバ・シェンラブが建立したボン

教の寺院があった。その寺院跡に、キュントウル=ジクメー・ナムカ・ドジェ (Khyung sprul 'Jigs med nam mkha' rdo rje, 1897-1955) が1936年、キュンルン・グルカル寺を建立した。この寺院は、文化大革命によって破壊されたが、1990年代にテンジン・ワンタク (bsTan 'dzin dbang grags) 師によって再建され、優秀な僧侶たちが育成されている。

B. コンポ・ボンリ (Kong po Bon ri)

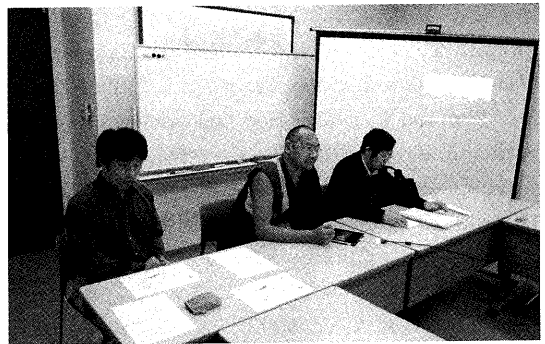
- ・カイラス山に次ぐボン教第2の聖山。1330年、行者リパ・ドゥクセー (Ri pa 'brug gsas) によって聖山として開かれた。
- ・トンバ・シェンラブの活動を妨害する悪魔キャブパ・ラクリン (Khyab pa lag ring) によって、トンバ・シェンラブのチベット入りを阻むために作り出された「幻の山」に対抗するため、トンバ・シェンラブが神通力によって作り出した山がコンポ・ボンリである。
- ・悪魔の作り出した「幻の山」はトンバ・シェンラブに投げ捨てられた。ボンリ付近にあるラリ・ギヤント (lHa ri gyang to) 山がそれである。チベット初代王ニヤティ・ツェンポ (gNya' khri btsan po) は、この山に降臨したとも伝えられる。
- ・ボンリおよびその周辺には、トンバ・シェンラブが来臨した際のさまざまな逸話が伝わっている。
- ・ボンリにはいくつかの寺院がある。その中で最も古いのは、この山が聖山として開かれた14世紀に創建されたシギエル寺 (Srid rgyal dgon) である。

- 3) パチェン県 (sBra chen rdzong) 内にあるルンカル寺 (Lung dkar dgon) について
ルンカル寺は、その前身であるソク・ユンドウンリン (Sog g.yung drung gling) から数えて4代目の寺院にあたる。

- ・ソク・ユンドウンリン (Sog g. Yung drung gling) : 第3ラプジュン (rab byung) = 12世紀後半に建立されたと考えられる。3000~4000人も僧侶を擁す大寺院であったが、モンゴル人の軍隊によって破壊され、跡のみ残っている。
- ・ルンサン・シェルダク (Lung bzang shel brag) : ソク・ユンドウンリンの後を受け継ぎ、ダライ・ラマ7世の許可を得て、1715年にギャルワ・ツルティム (rGyal ba tshul khirims) によって建立された。ソク・ユンドウンリンに比べ規模は小さい。裏の岩山が崩れ、崩壊した。
- ・ユルン (g.Yu lung dgon) : ルンサン・シェルダク崩壊後の1808年建立。雪崩によって跡形もなく破壊された。
- ・ルンカル寺 : ユルン寺崩壊後の1870年に建立。パチェン県内にある30ほどのボン教寺院のうち、ルプク寺 (Klu phug dgon) に次ぎ2位・3位を争う規模を誇る。顕教・密教・ゾクチェンというボン教教義をすべて学ぶことのできる学問寺。文化大革命による破壊の後、ボン教の名門の家系に生まれたニマ・ロドゥ (Nyi ma blo gros) 師によって1988年に再建、インドに再建されたボン教の総本山メンリ寺でゲシェー (博士) の位を得たゲロン・ルンカル (dGe slong Lung dkar) と呼ばれる方が、後進

の指導に当たった。顕教学堂では、ゲシェーの位を得るための9年のカリキュラムが立てられており、すでに30人ほどのゲシェーを輩出している。

なお、前日の12月18日(水)16時30分より研究所内ミーティング・ルームにおいて講師を囲み、ボン教の教義と歴史および現状についての研究会を開催した。ボン教ゾクチェンの教義の中で「心」というものがどのように捉えられているのかや、ボン教のチャム、ティテン・ノルプツェ僧院における教育システムに関することなど、幅広い内容で議論がなされ、極めて意義深い研究会であった。



講師：ツルティム・テンジン師 演習室3 (響流館3F)

公開研究会(講演会)・共同研究会報告②

国際仏教研究 公開講演会 「日本仏教とグローバル化」開催報告

国際仏教研究 研究代表者・准教授 井上 尚実

2014年1月20日(月)、北米とヨーロッパで活躍する二人の国際的研究者をお迎えして「日本仏教とグローバル化」をテーマとする公開講演会が開かれた。最初に講演をされたのは、バックネル大学のジェームズ・マーク・シールズ准教授。カナダのマギル大学出身で、ピクター・ソーゲン・ホリ教授のもと「批判仏教」に関する博士論文で2006年に学位を取得し、その博士論文は2011年に Ashgate Press から *Critical Buddhism: Engaging with Modern Japanese Buddhist Thought* として出版されている。“Warp and Woof: Meiji New Buddhism as a Response to Globalization” (縦糸と横糸 [=経緯]: グローバル化への対応としての明治新仏教) と題された今回の講演では、明治の新仏教運動について、開国後に急速に進んだグローバル化への対応という観点から論じられた。古河老川 (1871-1899: 「経緯会」の設立者)、境野黄洋 (1871-1933)、渡辺海旭 (1872-1933)、高嶋米峰 (1875-1949) という四人の卓越した新仏教運動リーダーの業績に注目し、近代日本が置かれていた状況に応じて彼らが「仏教」「宗教」を再構成した様々な方法について論じられた。特に、ユニテリアン派の神学と社会倫理を大きく取り入れながら新しい形態の「社会的仏教」を創り出したことに注目した解釈を提示され、それが現代のエンゲージド・ブディズムにとっても批判的に参照すべきモデルとなり得ることを示唆された。

続いて後半は、“Japanese Buddhism and Globalization: A Multidimensional Approach” (日本仏教とグローバリゼーション: 多面的なアプローチ) というテーマで、ライプツィヒ大学宗教研究所のウーゴ・デッシー博士が、現代日本仏教が置かれているグローバル化の状況とそれへの対応のあり方について発表された。デッシー博士は2006年に「浄土真宗と社会倫理」に関する論文をマルブルク大学に提出して Ph. D の学位を取得し、その後ライプツィヒ大学に移り、2012年にドイツの大学教授資格を取得されている。教授資格申請論文では「日本宗教のグローバル化」をテーマとされ、それはすでに *Japanese Religions and Globalization* (Routledge, 2013) として出版されている。今回の講演ではパワーポイントに

より複雑な要素を図示しながら、様々な面でグローバル化している日本仏教の現状を分析し提示された。「グローバル化」の問題について宗教学や社会学の理論により客観的に分析する仏教研究が、日本ではまだ少ないだけに、視野が広がる刺激的な発表であった。

今回の二人の講師の先生は、今から10年ほど前、博士論文執筆のため同時期に京都に留学されていて、その頃はともに響流館4階のイースタン・ブディストのオフィスをよく利用されていた。講演の後のレセプションでは、懐かしい話に加えて今後の研究の展望について懇談し、交流を深めることができた。ジェームズ・マーク・シールズ准教授は、バックネル大学から1年のサバティカルを取得して、8月まで京都の国際日本文化研究センターで研究を続け、その成果を次の著書として出版する予定とのこと。ウーゴ・デッシー博士もライプツィヒ大学から1年の研究休暇を取得し、同志社大学一神教学際研究センターで4冊目の研究書を執筆中。お二人の精力的な研究計画をお聞きして、40代の中堅研究者となつてからも次々と学術書を出版し、意欲的に研究を続ける背景には、サバティカル制度を含む豊かな研究環境があることを思った。日本の大学も「国際化」を前面に打ち出すなら、研究環境の面でグローバル化を進める必要がある。



(James Mark Shields 先生 [前列向かって左] と Ugo Dessi 先生 [前列右])

公開研究会(講演会)・共同研究会報告③

ガンダンテクチェンリン寺図書館所蔵資料概況

西藏文献研究 前研究員・教授 松川 節

2014年3月7日、モンゴル国ガンダンテクチェンリン寺(以下、ガンダン寺と略称)学術文化研究所研究員のノロヴツェデン・アムガラン師を招聘し、西藏文献研究班の主催により公開講演会が響流館3階マルチメディア演習室で開催された。

N. アムガラン師は1978年生まれの少壮気鋭の仏教研究者で、インド・ダラムサーラに留学し、チベット語とチベット仏教を修めた。2013年8月に真宗総合研究所とモンゴル国立大学社会科学部との協定に基づく共同研究が実施された際、モンゴル・チベット仏教に関する専門的知識の提供者として、モンゴルでの現地調査に参加された。生粋のモンゴル人であるが、チベット語も堪能で、モンゴルにおけるチベット研究について、松川、三宅、武田各研究員と様々な意見を交換してきた。また、2013年7月より、モンゴル国のチベット学協会の事務局長という重職を務めている。



講師：アムガラン師
於 マルチメディア演習室(響流館3F)

講演は、1) モンゴル仏教史概要 2) チベットにおけるガンジョール・ダンジョールの編纂史とガンダン寺所蔵本について 3) ガンダン寺図書館所蔵チベット語經典の概要(タントラ、般若、中観、因明、声明、医方明、曆算学) 4) ガンダン寺図書館所蔵モンゴル僧がチベット語で著述した全集(sun 'bum) 全63種のリスト 5) ガンダン寺図書館所蔵モンゴル語經典の概要 6) 1960~70年代におけるガンダン寺僧侶の仏教文献研

究という内容で、多方面からガンダン寺図書館所蔵資料の概要と、それに対する研究状況が報告された。中でも、4)の全集リストは、学界に初めて報告したとのことで、モンゴル仏教史研究のための根本資料として極めて価値の高いものである。今後、大谷大学真宗総合研究所とガンダン寺学術文化研究所との共同で、これらの稀覯文献を整理・研究していく必要があるという点で、アムガラン師と西藏文献研究班は意見が一致した。

6) 1960~70年代におけるガンダン寺僧侶の仏教文献研究については、社会主義体制の下、宗教研究が制限されていたモンゴルにおける貴重な業績が紹介されているため、以下に転載しておきたい。

ガンダン寺図書館は、仏教文学と歴史文化の宝庫であるほか、仏教文献研究センターとしてもなりたっていた。1960年代半ば、この図書館を基盤とし、本寺の弟子たち、仏教文学の古典的教養をもつ者たちがこの種の研究の開始を志した。研究内容は、仏教文学の貴重な文献を研究して出版し、チベット語からモンゴル語に翻訳し、自らの伝統に則り、チベット語・モンゴル語の両言語で經典を著述することにあつた。本寺のハンボ=ラマであったノムチ・メルゲン・ガブジ・S. ゴンボジャブは、国際モンゴル語文学者第1回大会において、「モンゴル人がチベット語で著述した著作」という講演を行い、19世紀のモンゴルの歴史家ダルマダライの著した『モンゴル仏教の源：白蓮の数珠』をチベット語からモンゴル語に翻訳した。また、古代インドの古典的文学者カーリダーサの文学のモンゴル語訳について興味深い論文をモンゴル青年同盟の『ツォグ』誌に公刊した。モンゴル仏教文学の重要な遺産となるモンゴル語の2冊の巨大な辞書を新たに出版する事業にS. ゴンボジャブを始めとするガンダン寺の弟子たちが積極的に参加した。この2冊の辞書のうち1つはイシドルジが著し、全597頁で『賢者の海』という名を持つチベット語・モンゴル語辞書であり、もう1つは、プリヤド・モンゴルの学者ノムティン・リンチェン・ソマディラドナー(1821-1907)の著した1241頁からなる『愚蒙を清める燭明』という名の辞書である。S. ゴンボジャブはイシドルジの『チベット・モンゴル対訳語彙集・賢者の海』のモンゴ

ル語索引を完成させ、また、本寺の弟子ゴンボドルジ、ダンザン=オドセル、イシタブハイ、ダニガイ、ドゥゲル、オチル、ルハムジャブ、アヨーシ、チョグジャブ、バトスフ、ヤダムスレン、ドルジジャンツェンら仏教文学の各分野の古典的専門家の参加を得て、ソマディラドナーの辞書に、今まで翻訳されていなかった多くの難語を補い、旧訳を再検討することを完遂した。かくして、ガンダン寺の弟子たち、学僧たちの努力、科学アカデミーの近代的教養を有する学者・賢者の発案により、この辞書を1959年にウランバートル市で刊行した。1966年、S. ゴンボジャブの指導の下、ガブジ・T. ザンダン=オドセル、ゲブシ・S. ルハムジャブ、Sh. イシタブハイ、S. ダシダムバラは、古代インドの有名な哲学作品『ウダナヴァルガ』、『ドハルマパダ』という1400連の詩歌をチベット語・モンゴル語合璧で、ウランバートルで出版した。同様に、1970年代末に、ガブジ T. ザンダン=オドセルら一部の宗教専門家は、19世紀にガンジョールを点検したシャダルダンドル、ダムディンスレン2名の改訂を再度研究し、シャダルダンドルの改訂した戒律部の千ページ以上が無くなっていたのを、ナルタン版、フレ版に基づき、補って完成させた。T. ザンダン=オドセル、Sh. イシタブハイらは、『平和の白蓮』という名の平和をテーマにした礼賛詩をチベット語とモンゴル語の二言語で著述し、この書は、モンゴル語で1959年に、英語で1971年にウランバートル市で刊行された。この書において、平和と団結の意思を「吉祥八文様」で象徴し、ダンディンの『詩鏡論』の莊嚴

の方法に則って詩文化された。Sh. イシタブハイは、『詩鏡論』という文芸理論の書を学ぶことを求める人々に教えていた上に、この文芸理論の古いチベット・モンゴル經典の多くの誤りを、自らの幼少から口頭翻訳の伝統によって学んだその証拠に依拠して糺した。Sh. イシタブハイは『詩鏡論』の莊嚴方法によって平和をテーマとする語の索引をつくったうえに、文章修飾論によって文殊菩薩を礼讃する詩文をチベット語で著した。T. ザンダン=オドセルもまた『詩鏡論』を研究し、文章修飾された『白ターラー』を礼讃するチベット語で著した。これらの学僧たちは時の則に従って逝去したが、我が寺において学術文化研究所という名の学術研究機関が開設され、モンゴルの学僧たちの業績が研究されている。



講師を囲んで

公開研究会(講演会)・共同研究会報告④

「戦後沖縄芸術思想史論—彫刻家・金城実の親鸞思想に関する領域横断的研究」
研究班中間発表「現代沖縄と親鸞思想—彫刻家・金城実をめぐって—」

金城実氏講演「平敷屋朝敏と親鸞と沖縄と」

一般研究(福島班) 研究代表者・准教授 福島 栄寿

2014年3月22日(土)午後2時～4時半にかけて、大谷大学響流館4階会議室を会場に、本研究班の2013年度の成果発表を、大谷大学歴史学科学内学会「大谷大学日本史の会」(3月例会)との共催で行った。前半は研究班代表の福島が「現代沖縄と親鸞思想—彫刻家・金城実をめぐって—」と題して研究発表を行い、後半は金城実氏(沖縄県読谷村在住・彫刻家)から「平敷屋朝敏と親鸞と沖縄と」と題する講演をいただいた。

本研究班の研究課題は、金城氏の親鸞思想と反戦・平和思想の關係に着目し、現代沖縄における親鸞思想の展開を探ろうとするものであり、今回の福島氏の発表は、2013年度内に行った金城氏への聞き取り調査、三度の現地フィールドワーク及び収集文献類に基づく考察が主な内容であった。

発表では、はじめに金城氏の自宅アトリエや沖縄県内外に点在する代表的な彫刻作品を、パワーポイントを用いて紹介した。とくに親鸞が念仏弾圧・流罪時に時の朝廷を批判した「主上臣下、法に背き義に違し、忿を成し怨を結ぶ」との言辭を木製彫刻の親鸞像に刻み込んだ「愚禿親鸞」や、沖縄へ強制連行された韓国人をモチーフにした「恨の碑」は、金城氏が芸術を通した思想活動を考察する上で特に注目すべき重要な作品である。

続いて、金城氏が親鸞思想に関心を持ち始めた時期(1985年)から読谷村に「チビチリガマ世代を結ぶ平和の像」(1987年)を制作した時期に書かれたテキスト類を手がかりに、金城氏の芸術論・沖縄論・非戦論について考察した。具体的には、玉光順正(真宗大谷派僧侶)との出会いを通じて、親鸞の「浄土」思想に天皇制を越える可能性を直感し、山内徳信(元・読谷村村長)との出会いを通じて魯迅やケーテ・コルヴィッツを再発見した金城氏の思索は、「芸術は、民衆の解放の武器たりうるか?」「恨を解いて浄土を生きる」という言葉を紡ぎ出していったこと。また、金城氏主宰の「琉球親鸞塾」結成は、真宗大谷派の真宗同朋会運動の沖縄への展開史を考える上で重要な意味を持つこと。そして、その「琉球親鸞塾」は、読谷村内に2014年3月に建立された真宗

大谷派「何我寺」(知花昌一氏が住職)に引き継がれていくであろうことなどを指摘した。

後半の金城氏のご講演は、金城氏が昨年より執筆中の、沖縄を磁場として平敷屋朝敏(1700～34)と親鸞の思想史的意味を考察しようとする論考の内容に添ってなされた。金城氏は、主題として、琉球王朝時代、実権を握る祭温を風刺する落書事件を起こして処刑された平敷屋朝敏を取り上げながら、他方で、念仏弾圧された親鸞の朝廷批判に反権力的な精神を読み解き、朝敏の言動にも同様の精神が存在することを読み解こうとするのである。そして、組踊作者としては、朝敏が沖縄では長く黙殺されてきたことを指摘し、そうした歴史に、沖縄が今日も未だに抱える思想的課題があると論じた。

当日は、学内関係者約10名以外に、金城氏と親交のある方々や市民約20名が来聴に来られ、盛会となった。以下、当日配付されたレジュメを元に、講演要旨を掲載する。

「平敷屋朝敏と親鸞と沖縄と」 金城実

平敷屋朝敏(1700～34)が生きた時代の琉球王は尚敬王(1700～51)であった。父の急逝によりわずか13才で即位した。尚敬王は、政治、経済、文化の分野で、多彩な人材に恵まれて、尚真王が成し遂げた「黄金の時代」に対し、「第二の黄金時代」、いわゆる琉球ルネッサンスとも呼ばれる時代を築きあげる。

多彩な人材とは、まず蔡温(1662～1761)という人物である。尚敬13才、蔡温31才。1713年の尚敬の即位にともない、国王の助言者となった。尚敬は、蔡温の教え「学んだことは必ず実行する」との、陽明学に基づいて、農政、林業、琉球松を国中に普及させるなどの行政改革に乗り出す。さらに、芸術、文化にも及んで力を発揮した。それが、「組踊」である。

その時代に代表される教育者・詩人で、のちに寺子屋の教科書となって日本中に普及した『六諭衍義』を中国から持ち帰った程順則(1663～1735)がいる。彼は慶賀使として江戸へ行く際に、薩摩藩主の島津吉貴にこ

の本を贈った。鳥津を通して八代将軍・徳川吉宗の元に献上された本である。琉球人材育成のために「明倫堂」という学校を久米村に創設し、儒学の教えをもとに、節度と誇りある琉球人を育成していった。順則は、江戸では新井白石とも、意見の交換などを行い、白石はそこで得た知識を基に、『南島志』を書いたといわれている。

66才になった順則は、名護間切の総地頭に任命され、「名護親方」となる。1734年、くしくも、平敷屋朝敏と同年に二人とも生涯を閉じている。不思議にも、劇聖・玉城朝薫(1684~1734)の死去も1734年である。

玉城朝薫は、三味線の澁水流たんすいりゅうを学び、才能を開花させていった。1713年、朝薫29才(尚敬王13才、朝敏13才)のとき、尚益王一周忌のため踊奉行をつとめた。踊奉行とは、国王、王妃、王子などの年忌の際に臨時に任命される役職で、冊封使(中国皇帝が琉球王国を任命するために遣わす使節。約五百名の規模であったという)を歓待する式典でも舞踊の監督や指揮を執る役職であった。

1718年、尚敬王は、再び踊奉行として朝薫を任命し、はじめて本国の故事をもとに、組踊を創作させた。朝薫の組踊は、前述の、程順則の道德教育の影響を受けて、儒教道德の「忠」、「孝」をテーマに台詞の唱えと調和のとれた歌や、演奏、舞踊を取り入れ、格調高い様式美に仕上げた。

では、平敷屋朝敏の場合はどうだろうか。琉球王朝の音楽と芸能には、倫理道德を核としたが、冊封使を迎える御冠船芸能の組踊は玉城朝薫創作五ついずれも、忠、孝、節義を表現するもので、その後、四十数種の琉球組踊が創られたが、愛情内容をテーマにしたのは、唯一のもの、朝敏の『手水の縁』であった。この『手水の縁』について、玉栄清良は、次のように評価している。

『手水の縁』を書いた当時、作者の激しい政治批判は落書や投書の実践的行動に移りつゝあった。そのような状況のなかで抗議として書かれた『手水の縁』の主題は当然、作者にとっては政治的行為でもあったのだ。当時、ゆるやかではあったが盛上がりつゝある下級武士や農民層の抵抗意識をはっきりと認識し、それを正しいとし、それを背景にして封建秩序との対決に進み出たのである。彼にとって文学は“解放のための武器”であった。

(『平敷屋朝敏の文学』東海出版、1967年 192頁)
また、玉栄によれば、朝敏を“珍しい存在”として、次のように日本文学と、琉球文学を比較している。

悲劇の背景の歴史の本質には眼が届かなかった。興隆する大阪町人の歴史を生きた作家たちでさえ、右のように狭い限界でしか人間を描くことが出来なかった。同時代琉球の代表的作家、玉城朝薫をはじめ、高宮城親雲上(組踊花売の縁の作家)らも義理の尊重すべきことは強調しても、封建的秩序への疑問も弱く、その矛盾にも気が付かなかったから強烈に生きた人間が描けなかった。そういう作家たちのなかで唯一人、平敷屋朝敏が人間を“封建社会の本質において”とらえ、その矛盾の打破に進み出る人物を描いたことは驚くべき人間認識であり、“社会認識”であり、またその“文学的達成”であったと言わねばならない。(同前、193頁)

玉栄清良による朝敏に対する芸術論的評論は、私の芸術表現としての、「芸術は解放の武器たりうるか」という問いとの接点をかきまみることができる。これらの対比は、島崎藤村の『破戒』と久志美沙子の小説「滅びゆく琉球女の手記」(『婦人公論』1932年6月号)との対比で見ることができる。つまり、差別され、虐げられた民衆に対する抵抗の軸足と立つ位置が、差別の社会構造を作り出している権力に向いているかどうか、という点であろう。

そういう意味において、親鸞聖人と平敷屋朝敏の歴史的接点が大きく結びついていることになる。もっと平たく言うならば、義理と人情物語に終わってしまう限界を超えて、権力に抵抗するということである。このことは、中国の文学者・魯迅を例に挙げれば、中国の儒教・封建社会において自由を奪われた民を見て、絶望に打ちひしがれ、迷いあぐねる道を進むときに、抵抗する文学を多数書き続けた、ということである。圧政への民衆の抵抗なのか、又は内に向けて可哀想とする同情を乞う作品なのか。ウチナー言葉の肝苦りさ、又は深く朝鮮語の恨(恨とは社会的抑圧に発する諦念と悲しみの情が自の内部に沈殿し積もった状態をいう。課せられた不当な仕打ち、不正義への奥深い正当な怒りを表す朝鮮語)を解く表現なのかの相違にあるといえよう。

社会の差別構造は今でも全く変わらない。原発事故、ハンセン病、被差別部落、アイヌ、在日コリアン。沖縄に関して、基地問題や最近でも竹富島の中学公民教科書の採択を巡る強制問題など枚挙にいとまがない。これらの問題は、この日本の社会においてどういう意味を持つのか。親鸞、朝敏の時代と、今日の社会の差別構造について考えさせられる課題である。

(文責 福島)



講演中の金城実氏



研究会室内

大谷大学史資料室活動報告

2013年度活動報告

——全国大学史資料協議会への参加、及び公開研究会の開催を中心に

大谷大学史資料室 研究補助員 松岡 智美

大谷大学史資料室の主な業務は、年史編纂を目的とした大学に関する史資料の収集、整理、保存、公開である。現在は所蔵資料の公開に重きを置き、図書館1階エントランスにおけるスポット展示の開催や、武田武麿先生（元大谷大学教授）から寄贈された資料の整理、当資料室所蔵のフィルム資料のデジタルデータ化を行っている。

デジタルデータ化については、旧「近代史研究班」が西方寺等で撮影したフィルムや旧「学事史研究班」の撮影フィルムが終了したので、今後は未整理フィルムの把握とそれらのデータ化作業を並行しておこない、データ化が終了したフィルムから随時目録作成を進めていくことになる。

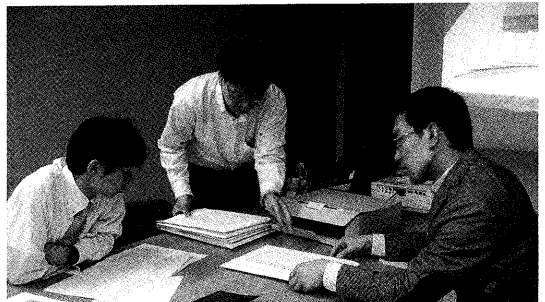
また、スポット展示では、真宗大学が巣鴨で開校した1901年（明治34）にスポットを当てた「大谷大学 in Tokyo」展と、赤レンガ100周年記念として、京都に移転した1913年（大正2）にスポットを当てた「100年前の大谷大学」展を開催した。これらの展示を通して、当資料室所蔵資料を広く公開していくと同時に、自校史教育の役割を担うことができると考えている。

そこで、他大学における大学史への取り組みを参考にするため、全国大学史資料協議会の研究会にも参加した。2013年度後期には、2013年10月9日（水）から10月11日（金）まで明治大学・国立公文書館にて全国大学史資料協議会2013年度総会ならびに全国研究会が開催され、「大学史資料の活用と展示」をテーマにすすめられた。12月4日（水）にエル・大阪（大阪府立労働センター）にて開催された西日本部会第4回研究会では、谷合佳代子氏が「MLA融合型図書館の活動」という題で講演し、その後、千本沢子氏の解説によるエル・ライブラリー（大阪産業労働資料館）の閲覧室や書庫、三池炭鉱灰じん爆発50年展「むかし炭鉱、いま原発」の見学が行われた。これら二つの研究会に参加して、企画力や資料公開の重要性を再認識するとともに、地域や大学（史）に携わってきた教員との連携や、Museum と Library と Archive の三者

の連携関係を構築していく必要を感じた。

しかし、現状において、大学史資料室には業務を進める上での情報やノウハウの蓄積が不十分であることは否めない。そこで、2014年3月26日（水）に大畑博嗣氏（大東市立歴史民俗資料館学芸員・元大谷大学真宗総合研究所研究補助員）を講師に招き、「大谷大学史資料室の変遷と大学史関係史料の整理・保存について」と題した公開研究会を開催した。大畑氏からは、2009年度に行われた全国大学史資料協議会西日本部会の第1回研究会での内容を基に、長年、当資料室に携わってこられた経験を踏まえて様々な話を聞くことができた。それは、「大谷大学資料」の整理方法をはじめ、当資料室所蔵の写真とアルバムの再調査や撮影等に関する詳細な説明、史資料の保存方法、その中に記載されている個人情報管理の課題、2015年度の学寮創設350年に向けての資料室の展望等、示唆に富む内容であった。

これらの活動を通じて、当資料室の現状を把握するとともに、大学史に関する史資料を長期にわたって保存、活用していくための体制作りや、史資料の公開方法について、さらに検討していかなければならないことが分かった。百五十年史や二百年史といった将来的な年史編纂のためにも、まずは所蔵史資料中の未整理史資料の把握とフィルム資料の経年劣化を防ぐ対策を最優先課題にしていきたいと思う。



大畑博嗣氏を招いての公開研究会

2013年度「特定・指定研究」研究成果報告会について

2013年度「特定研究・指定研究」研究成果報告会

真宗総合研究所主事・准教授 藤田 義孝

2014年3月6日(木) 13:00~15:00に響流館3階マルチメディア演習室において、2013年度「特定研究・指定研究」研究成果報告会が公開で行われた。草野顕之学長をはじめ、浅見直一郎所長、各研究班の研究代表者など多数の参加者があった。はじめに学長から挨拶があり、特定研究の1研究班、および指定研究「国際仏教研究」の英米班、ドイツ・フランス班、東アジア班の3研究班と「西藏文献研究」の1研究班、計5つの研究班が各15分間の報告を行った。

1. 特定研究

「建学の精神」教育推進研究

研究課題：大谷大学建学の精神の具現化

報告者：研究員・チーフ 木越 康 教授

3年にわたる研究の成果として、学生・教職員が共に「建学の理念」を学ぶうえ基本テキスト『大谷大学で学ぶ―建学の精神―』が完成した。2014年4月から、教育研究の趣旨に賛同した教員による人間学の授業で試用される。

2. 指定研究

「国際仏教研究」(英米班、ドイツ・フランス班、東アジア班)

研究課題：諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の整理・収集・公開

1) 国際仏教研究 (英米班)

報告者：研究代表者・研究員 井上 尚実 准教授

(1) 阿満道尋嘱託研究員を中心に、真宗大谷派北米開教区真宗センターから出版予定の『浄土の真宗』『宗門の歩み』の英訳について、翻訳チェックと編集校正に協力。

(2) 5月31日~6月2日の3日間、カナダのバンクーバー市、ブリティッシュ・コロンビア大学で開催された第16回国際真宗学会(IASBS)大会に参加し、大谷大学・龍谷大学合同パネルで「親鸞の浄土思想の特質―その信と証の解明に注目して―」というテーマの研究発表を行った。

(3) 10月26日・27日、ハンガリーの学術提携校エ

トヴェシ・ロラード大学(ELTE)を会場に開催された大谷大学真宗総合研究所・ELTE東アジア研究所共催の国際シンポジウム「仏教における信」に参加し、研究発表を行なった。公募で選ばれた博士課程学生2名もシンポジウムに同行し、ELTEの研究者や博士課程学生と学術交流を行なった。

(4) 3名の研究者による2回の公開講演会を開催した。

2) 国際仏教研究 (ドイツ・フランス班)

報告者：研究員 藤枝 真 准教授

(1) 8月4日~10日まで、ギリシアのアテネ大学において開催された第23回世界哲学会議に参加し、研究発表を行った。

(2) マールブルク大学神学部ディートリッヒ・コルシュ教授の著書『マルティン・ルター入門』(第2版)の翻訳を完了し、出版を計画中。

3) 国際仏教研究 (東アジア班)

報告者：研究員 松浦 典弘 准教授

(1) 中国社会科学院歴史研究所から2名の研究者を招聘し、12月6日に公開研究会を開催した。

(2) 2月10日に京都大学人文科学研究所訪問研究員の朱玉麒氏を招聘し、公開講演会を開催した。

(3) 3月3日~6日に研究員が中国社会科学院歴史研究所を訪問し、研究発表を行った。

3. 指定研究

「西藏文献研究」

研究課題：チベット語文献およびバリー語貝葉写本のデータベース化

報告者：研究代表者・研究員 福田 洋一 教授

(1) 『サンブ明鏡史』の校訂テキストと和訳を完成し、次年度刊行予定。また、『俱舍論語義解明・善説の陽光』の電子テキスト入力を完了。

- (2) 図書館蔵稀覯写本『マハーブッダグナンヴァータ・アッタカター』をクメール文字からローマ字に転写完了し、『紀要』31号に掲載。
- (3) 寺本婉雅の日記『新旧年月事記』の翻刻を完了し、『紀要』31号に掲載。
- (4) モンゴル国立大学社会科学部との学术交流協定に基づき、共同研究を開始。研究員を派遣して8月7日～16日にモンゴル各地で遺跡・寺址を共同調査した。
- (5) 7月21日～27日にモンゴル国立大学で開催された第13回国際チベット学会に参加し、研究報告を行った。
- (6) 7月2日～8日にポルトガルのリスボンで開催

された第5回ヨーロッパ東南アジア学会議に参加し、研究発表を行った。

- (7) 海外から4名のチベット学研究者を招き、4回の公開研究会を開催した。

この報告会は、2010年3月に公開で開催されて以来、5回目を迎える。国際的な研究機関・研究拠点としての大谷大学の活動を全体的に把握できる得がたい機会であり、研究所関係者以外の参加者をもっと増えても良いように思われる。次回には、院生や研究員、研究補助員、教員にも広く参加を呼びかけ、さらに開かれた報告会の実現を目指したい。

特別研究員研究成果報告①

清沢満之の来世：20世紀における真宗の近代化の研究

(2012 - 2013 年度) 特別研究員 シュローダー・ジェフリー

研究の目標

佛教と近・現代の世界との関係に興味を持つアメリカ人の学生として、清沢満之の著作の英訳を早々に手に入れた。鈴木大拙に次いで、最も多く英訳されており、また英語の仏教学界で最も多く議論されている日本近代佛教の人物が、清沢満之だと言える。鈴木は長生きし、生きている間に、よく知られ尊敬された。その一方で、清沢は早死にしたため、名を上げたのが彼の門下達と宗団によってであった。私の研究は、清沢が1903年に除け者として地方の質素な寺で一人きりで死んだ時点と、2003年に英雄として本山で大勢の信徒や多くの出版物で称賛された時点とを、歴史的に結ぼうと試みるものである。

研究の目標は清沢の生涯と著作を新たに解釈することではなく、また「純粋な清沢」を発見することでもなく、むしろ清沢の死後の影響を検討することである。つまり、清沢の門下達がどのように清沢の教えを生かしたり実現したりしようとしたのか、批判者がどのようにそれに抵抗したのか、更には、大谷派の当局がどのように清沢を取り込んできたのかと言う点である。水島見一氏と他の学者がこの話題を取り上げたこともあるが、広い歴史的視点から、また外部者の視点から、この話題にアプローチすることで、浄土真宗の20世紀における近代化について、新たな知見を提供する。

研究結果

博士論文は6章から成る。これまでに、前半の下書きを完成した。

第1章では、清沢の著作の中で宗教的「実験」と「経験」と「事実」の言説が次第に出現することを検討する。大まかに言えば、あるものの現実が疑問視されている時に、人々は「経験」の言説に取り掛かる。世俗的科学的明治時代においては、阿弥陀仏と浄土の現実が疑問視されていたので、それらが「経験」と「事実」に基づいていると、清沢が主張したのは自然であった。しかし、その「宗教的経験」の言説に至るに、客観的現実しか認めなかった「経験主義」を再定義する必要があった。この点において、シュライアーマッハー (Friedrich Schleiermacher) の影響の重要性を論じる。また、清沢

が宗教の「経験的基礎」を主張することに加えて、道理と科学は不完全で信仰に頼ると主張した。この点において、スペンサー (Herbert Spencer) の影響が大きかったことを明らかにした。筆者の分析によると、清沢の宗教への主観的アプローチと科学への批判は『宗教哲学骸骨』から「我が信念」までほとんど一貫していた。その一方で、「経験」の言葉遣いは著しく変化した。

第2章では、清沢の門下達がこの「宗教的実験」や「主観的事実」の言説を取り上げ、どのように近代的科学的「真宗学」を成立させたのかを検証する。例証として、『精神世界』に掲載された清沢を記念した様々な記事や佐々木月樵の『実験之の宗教』、曾我量深の「地上の救主」、金子大栄の『真宗学序説』、暁鳥敏の「主観的信念の客観的妥当性」を分析する。この新たな真宗学には、「経験主義」の近代的言説に加えて、「隠れた意味」と「師弟伝承」への密教的関心も含まれているのを明らかにする。次に、宗門雑誌と仏教系全国紙を検索することで、彼らの近代的真宗学が、「客観的」仏教学と平行して、「主観的」学問として広く認められたという証拠をあげる。清沢や佐々木、曾我、金子が、「宗学」と「仏教学」(もしくは、「神学」と「宗教学」)の間にある溝を跳び越えようとしたり、有益な対話の機会を作り上げたりすることに、大きな意義があると結論付ける。この研究は2014年度の *Japanese Religions* に掲載される。

第3章では、金子大栄の「異安心事件」を見直そうと試みる。以前の研究は、金子の「浄土」の理論より、彼が代表した近代的「真宗学」の方が問題にされたことを明らかにした。筆者が更に指摘したいのは、金子と曾我の追放は彼らの強まりつつある権力への一時的で中途半端な対応に過ぎなかった点である。「真宗学」学科の成立や佐々木と曾我の任命などは、近代派の権力が宗門の中で強まっていることを示すものであった。更に、宗門の外で、自由討究や論理的「経験的」研究を重要視した思想界が金子を守り、大谷派を厳しく批判した。こうした状況に直面するに、教団の当局は金子と曾我の関係を断ち切りたくなかった(または、断ち切れなかった)。そのため、法主と侍董寮が明らかな「異安心」の判決を下さなかったのである。金子と曾我を追放するのは一時的な措置に過ぎず、近代的学問としての真宗学の成功を

取り消すものではなかった、と筆者は論じる。この研究は *Modern Buddhism in Japan* (南山宗教文化研究所、2014年) に発刊される。

研究予定

第4章では、清沢が「正統化」されてくる過程の中で極めて重要な出来事であった曾我と金子の1941年の復帰の背景を明らかにする。彼らの戦時の著作も分析す

る。第5章では、曾我の戦後の著作と真人社の運動を検討する。特に、社会変化や核兵器の存続の背景において、曾我と真人社が科学に対してどのような態度を持っていたのかを明らかにしたい。第6章では、訓覇信夫や教化研究所、同朋会運動を取り上げ、清沢がどのように正統化されたのか、また彼の近代的真宗がどのように真宗の信徒に受け入れられたのかを検討する。

特別研究員研究成果報告②

チベットの伝統宗教の越境と存続に関する 文化人類学的研究

(2012 - 2013 年度) 特別研究員 小西 賢吾

はじめに

筆者は2012-2013年度の2年間、日本学術振興会特別研究員PDとして科学研究費(特別研究員奨励費)の交付を受け、真宗総合研究所において研究に従事した。以下ではその研究内容と成果について報告する。

本研究は、チベットの伝統宗教であるボン(ボン)教を対象に、グローバル化のもと宗教が国家や地域の境界を越えて求心力を保持し存続する要因を、担い手の人々の移動と協働の過程から解明することを目的としている。

ボン教はチベットへの仏教伝来以前からの伝統の流れをくむといわれる宗教であり、チベット仏教との複雑な相互関係の中で教義や僧院システムを発展させ、現代にいたるまでチベット高原の各地で存続している。筆者は2005年以降、東チベットのシャルコク地方(四川省松潘県)を中心に現地調査を行い、ボン教の現状に関する知見を積み重ねてきた。本研究では、ボン教がチベット仏教の諸宗派と同様に、20世紀後半以降世界各地へと実践の場を広げてきた状況を踏まえ、移動元と移動先での実践を支える人・モノ・知識の超地域的なネットワークを調査し、現代においてボン教を存続させる協働の実態を解明する。さらに、越境するボン教の実践の中に地域性と普遍性がいかなる形で立ち現れるのかを、教義や歴史との関連を含めて明らかにするものである。

研究内容

1 フィールドワークによる一次資料の収集と分析

フランス、ロワール地方およびインド、ヒマチャル・プラデーシュ州、中国北京市(2回)、成都市、アバチベット族チベット族自治州松潘県において、資料の収集を行った。主な調査項目は1. チベット外部に設立されたボン教僧院の現状と僧侶の活動、2. 民族を越えたボン教実践の展開、3. 地域を越えて活動するボン教僧侶の出身僧院をめぐる社会経済的状況である。

1では僧院の運営と僧侶の活動に関する参与観察を行った。インドのメンリ僧院では、ボン教の「正統」を担うセンターとしての機能を整備し、ボン教徒としてのアイデンティティを強化する動きが進行している。僧侶

の多くを占めるアムド地方出身者が、出身地固有の「伝統」に加えて、ボン教の「正統」を学び実践することによって、ボン教徒の活動の広域的な活性化が企図されている点が明らかになった。一方、中国のボン教僧院では、1990年代以降学僧たちが北京の高級仏学院など、中央の教育機関に教員・学生として滞在するケースが増加している。こうした経験を通じ、漢語と漢族社会の生活様式を身につけた僧侶は、漢族に向けた布教活動を通じて、中国におけるボン教の民族を越えた展開にも関与していることが明らかになった。僧侶たちは「総本山」としてのインドと、チベット各地の僧院双方に軸足を置きながら、宗教実践の場を維持していることが示唆された。

2では、フランスのボン教センターにおける瞑想を軸にした講習、続いて中国都市部におけるボン教僧侶の活動の参与観察を行った。その結果、前者では心の平安を得る手段、生き方の指針としての宗教実践が求められているのに対し、後者ではそれに加え事業の成功や家庭問題の解決等、現世利益的側面からもボン教が注目される傾向があることが明らかになった。また両者に共通するのは、師としての高僧の資質や魅力が、ボン教に触れる大きな動機になっている点であった。このような、文化の差異をこえて人びとの身心に訴えかける要素がボン教の越境を支える重要な要素だと考えられる。また、彼らが使用する翻訳テキストには、仏教と共通の概念も多く含まれるものの、ボン教のルーツとされる西チベットのシャンシュン王国への言及が多く見られ、インド伝来の仏教と異なることが明示されていた。これは近年ボン教を「チベットの土着宗教」と表象する内外の僧侶や研究者の動きとも対応していると考えられる。

3では、四川省のチベット社会のボン教僧院を対象に、近年行われた僧侶教育施設の拡充や、近接する村の観光地化の進行についてインタビューと参与観察を行った。その結果、2000年代の開発政策による経済成長を経て、2010年代に入って沿岸部を中心とする漢族の富裕層と、村・僧院との結びつきが強まっていることが明らかになった。そして漢族からの寄付や投資の増加と並行して、僧侶の都市部への移動が増加したことが明らか

になった。民族を越えた協働によって、学校建設などの公共性の高い事業が近年多く展開しており、ボン教の地域を越えた展開が生み出す社会的影響についても重要な知見が得られた。

2 研究課題に関連する文献調査

フィールドワークと並行して、受入教員である三宅伸一郎准教授の支援を得て、アムド地方のボン教僧院の歴史とそこで活動した高僧の伝記など、関連するチベット語文献の読み込みを行った。これによって、1950年代以前のボン教僧院の姿を明らかにするとともに、改革開放後にどのような形で僧院と教義の復興が行われたのか、また高僧の地域間移動を通して、教義のどのような要素が地域を越えて受け継がれるのかに関する知見が得られた。この結果を、フィールドワークによる一次資料と組み合わせることによって、ボン教の越境と存続に関するより通時的な記述に結実させた。

研究成果の公表

以上の研究から得られた知見と、これまでに行ってきたアムド地方を対象とする調査研究の成果を組み合わせ、下記の通り成果として公表した。

論文1では、ボン教徒の行為に通底する「善行」と「功德」の概念に関する考察を行った。論文2では、瞑想などの実践を通じてボン教徒が宗教的知識とローカルな歴史を継承する過程についてまとめた。これは第3回若手チベット学研究者会議での発表（発表2）に基づいている。論文3では、集団的な宗教実践が参加者の身心に及ぼす影響について論じた。また論文4では、地域・民族の境界を越えて生きるボン教僧侶の生活の現状について論じ、現在刊行準備中である。

発表1では、ボン教の存続における宗教指導者の役割について論じ、国立民族学博物館若手共同研究「内陸アジアの宗教復興」の成果として公刊予定である。発表3では、身体技法の継承からみる僧院共同体の運営について論じ、*The Journal of the International Association for Bon Research* 所収論文として公刊予定である。発表4では、ボン教僧侶の地域間移動が宗教実践の存続に持つ意義について論じ、「日本西藏学会会報」に投稿中である。

また筆者の博士論文にこれらから得られた知見を加え、学術図書としての出版を準備中である。

本研究と関連する研究成果（既発表分・印刷中含む）

論文

- 1 小西賢吾2013「チベット、ボン教徒の実践における「功德」をめぐる概念とその役割」兼重努・林行夫（編）『功德の観念と積徳行の地域間比較研究』（CIAS Discussion paper No 33）pp.71-80。
- 2 KONISHI, K. 2014 "Between Indigenous Religion and Religious Minorities: Bonpos' Attempts to Continue Tradition in Contemporary China" In Tsuguhito Takeuchi, Kazushi Iwao, Ai Nishida, Seiji Kumagai and Meishi Yamamoto (eds.), *Current Issues and Progress in Tibetan Studies: Proceedings of the Third International Seminar of Young Tibetologists, Kobe 2012* (Journal of Research Institute, vol. 51), pp.219-236. Kobe: Kobe City University of Foreign Studies.
- 3 小西賢吾2014「チベットの宗教と身心変容技法の社会性」『身心変容技法研究』3：25-35。
- 4 小西賢吾（印刷中）『周縁』を生き抜く僧侶たち—四川省チベット社会、ボン教僧院の事例から—毛里和子・澤井充生・田中周（編）『中華人民共和国と少数民族』勉誠出版。

学会発表

- 1 小西賢吾「宗教の再構築における指導者と地域社会再編の関係—中国四川省のチベット社会におけるボン教を事例に」日本文化人類学会第46回研究大会（広島大学）、口頭発表、2012年6月23日。
- 2 KONISHI, K. "Between Indigenous religion and Religious minorities: Bonpos' Attempts for the Continuation of "Tradition" in Contemporary China", 3rd International Seminar of Young Tibetologists (神戸市外国語大学 UNITY)、口頭発表、2012年9月6日。
- 3 KONISHI, K. "Managing Bonpo Monastic Community: with special reference to performance of 'cham in contemporary Amdo Shar-khog", 13th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, National University of Mongolia (モンゴル、ウランバートル市)、口頭発表、2013年7月22日。
- 4 小西賢吾「ボン教の実践にみる普遍性と地域性—アムド・シャルコク地方の事例から」日本チベット学会第61回研究大会、高野山大学、口頭発表、2013年11月17日。

特別研究員研究成果報告③

契丹語資料を用いたモンゴル語史の研究

(2011 - 2013) 特別研究員 武内 康則

2011年4月より真宗総合研究所特別研究員として研究を開始した。研究の対象は10-12世紀に使用された契丹文字である。契丹文字資料には、遼(916-1125)を建国した契丹人の使用した契丹語(死語)が記録されている。契丹文字は古代モンゴル語を記録した貴重な資料であり、契丹史研究にも利用可能な資料であることから、言語学・歴史学にとって契丹語の解明は重要な研究テーマと言える。本研究課題では、特に契丹文字資料の文献学的研究と契丹語の言語学的研究を主としている。

2011年度

本年度はモンゴル国に残る契丹文字資料の調査を行った。特に注目したのはモンゴル国ドルノゴビ県にて発見された碑文(プレーニイ・オポー碑文)である。実見調査・研究を行い、契丹大字が記されていることを認め、文字の同定および一部内容の解釈に成功した。

さらに、契丹小字の音価推定・契丹語の音韻分析のために、契丹文字と漢字との対音データの組織的な収集を行い、契丹語の音特徴について検討した。国際学会等にて研究成果の報告を行った。

2012年度

2012年度はこれまでに研究してきた契丹語に関する研究を博士論文としてまとめ提出した。当該論文においては契丹語について現在できる範囲での文法記述を試みた。

2012年7月には、契丹大字で記された冊子本を世界で初めて発見したロシア科学アカデミー東洋文献研究所のV. Zaytsev氏を招聘し、実質的な主催者として大谷大学において契丹語に関する国際シンポジウム(International Symposium on Khitan Studies: Problems on Khitan Language and Script)を開催するとともに、ロシア国外では初めて当該資料についての研究発表会を行った。

2013年度

2013年度は、これまで組織的に研究されてきたと言いつても難しい契丹大字の異体字字典の作成に向けてその方法論を検討した。電子化された拓本・写真データから切り出すためのツールやそれらを用いることで以下に字典の作

成に向け、データの作成を進めるのか、情報処理の専門家との議論を進めた。

2013年11月には大阪大学歴史教育研究会にて高校の教員に対して契丹文字についての講演を行うなどアウトリーチ活動も行った。

特別研究員任期中に発表した論文等は以下のものがある。

1. 武内康則、「拓跋語と契丹語词汇拾零」、『华西语文学刊』第八輯、pp. 73-76、2013.
2. 武内康則、「最新の研究からわかる契丹文字の姿」、荒川慎太郎・澤本光弘・高井康典行・渡辺健哉 編『契丹 [遼] と10~12世紀の東部ユーラシア』東京：勉誠出版、pp. 156-165、2013.
3. 武内康則、「契丹語和中古蒙古語文献中の汉语喉牙音声母」、『満語研究』、2012年第2期、pp. 29-33、2012.
4. 武内康則、「契丹語的“左”和“右”」、赤峰市人民政府、内蒙古博物館、中国社会科学院民族学与人类学研究所、赤峰学院 編『契丹学国際学術研討会會議論文集』、pp. 343-348、赤峰、2012.
5. 長田礼子・吉池孝一・武内康則・中村雅之、「長田夏樹氏旧蔵拓本目録」、『KOTONOHA』、第115号、pp. 1-3、2012.
6. 武内康則、「契丹文字解読の最前線—プレーニイ・オポー碑文に挑む」、『Field+フィールドプラス』、No. 8、pp. 6-7、2012.
7. 武田和哉・毛利英介・森部豊・藤原崇人・山根弓果・武内康則、「補注：加藤修弘『遼朝北面の支配機構について—一著帳官と節度使を中心に—』」、『九州大学東洋史論叢』、第40号、pp. 85-91、2012.
8. 武内康則、「モンゴル国契丹大字碑文の調査について」、『遼金西夏史研究会 News Letter』、第4号、pp. 36-39、2012.
9. Shen, Yingji and Yasunori Takeuchi. 'Treatment of the Mandarin Unaspirated Consonants Adapted in Mandarin Loanwords in Yanbian Korean' 『音韻研究』. Vol. 14. pp. 51-62. 2011.

特別研究員研究成果報告④

プラトンの中期イデア論の生成

(2011 - 2012) 特別研究員 西尾 浩二

研究成果を報告するにあたり、まず本研究の目的を記す。本研究の目的は、古代ギリシアの哲学者プラトンが中期対話篇（『国家』など）で提示する形而上学的理論である「中期イデア論」に関して、彼の前期対話篇（『エウテュプロン』『ソクラテスの弁明』『メノン』など）にまで遡り、その生成の背景を明らかにすることであった。本研究は、平成23年度から25年度までの科学研究費補助金交付による研究であり、具体的な目的として以下の諸点が設定されていた。

- (1)プラトンの前期対話篇にみられるソクラテスの「何であるか」の問い（「勇気とは何であるか」など一般に定義の探求とみなされている問い）から中期イデア論が生成するには、どのような背景があるのかを明らかにすること。
- (2)この(1)の解明過程で前期対話篇のうちでもとくに「敬虔とは何であるか」を主題とする『エウテュプロン』に焦点を当て、探求における定義の優先性の問題や、イデア論とのつながりをはじめとしてさまざまな論点から、この対話篇を総合的に研究し、解説・注解付き翻訳を作成し公刊すること。
- (3)これら(1)(2)を踏まえた発展的研究として、中期イデア論を捉えなおし、それによって中期プラトンの教育思想へ新たな光を当てること。

実際の研究過程では、これら3点のうちで最も基礎的である(2)を主たるターゲットとして研究を進めた。それによって、より一般的な問題である(1)についても何らかの示唆が得られるだろうと予想したからである。そこで研究成果としては(2)について中心的に論述することとし、(1)についてはそれとあわせて触れることにする。なお、(1)(2)を踏まえた発展的研究である(3)については、本研究では十分に扱うことができなかった。

本研究の成果としてまず挙げられるのが、プラトンの前期対話篇のひとつである『エウテュプロン』の新しい翻訳と注解の作成である。翻訳の底本には、旧来のバーネット版 (Ioanenes Burnet, 1900) との異同にも注意を払いつつ、オックスフォード古典叢書 (Oxford Classical Texts) 中の新版であるプラトン全集第一巻デューク版 (E. A. Duke, W. F. Hicken, 1995) を用いている。この新しい校訂本に基づくこの著作の邦訳の公刊

は、おそらく本研究によるものが本邦初となるだろう（公刊の予定時期は後述する）。

翻訳と注解の作成にあたっては、いくつかの工夫をした。まず原典に忠実であると同時に現代の読者にも読みやすい訳文をつくるために、多数ある英語訳と日本語訳をつねに参照し、いくつかのドイツ語訳とフランス語訳をも部分的に参照した。また従来の研究に加えて最新の研究動向をも反映させるために、多数のコメンタリー——古典的なアダム (J. Adam, *Platonis Euthyphro*, Cambridge University Press: Cambridge, 1890) やバーネット (J. Burnet, *Plato: Euthyphro, Apology of Socrates, Crito*, Clarendon Press: Oxford, 1924) から、最近のベイリー (J. A. Baily, *Plato's Euthyphro & Clitophon*, Focus publishing/R. Pullins Company, 2003) まで——を参照し、その上で研究代表者自身も注解を新しく作成しながら翻訳作業を進めた。さらにまた、『エウテュプロン』とも関連性の深いプラトンの著作『ソクラテスの弁明』や『メノン』について、主要な注解と翻訳を調べ、それらを踏まえた新たな注解と翻訳の作成を部分的におこなった。

研究成果として次に挙げられるのが、ソクラテスの探求における定義の優先性の問題をイデア論との関連性のもとで解明したことである。探求における定義の優先性の問題とは、たとえば「美とは何であるか」（美の本質あるいは定義）をまず知らなければ「何が美しいものか」（美の事例）も「美は有益なものか」（美の特性）も知ることはできない、といった立場がソクラテスのものであるのか、またそうした立場が哲学的に正しいかどうかという問題である。プラトンの原典にはこの立場を示唆するように思われる箇所が複数見られる。だがソクラテスは「何であるか」を知らないと言主張するのだから、この立場は（対話篇でソクラテスがしているように見える）事例を用いた定義探求すら不可能にしかねないことになる。つまりこの問題は、ソクラテスの対話活動（「何であるか」の探求）の有効性、ひいては広く哲学的探求の有効性にもかかわってくるのである。近年では、こうした立場（「ソクラテスの誤謬 (Socratic fallacy)」とも称される見解）をソクラテスが実際にとっていたとするギーチの問題提起 (Geach, P. T. (1966) 'Plato's

Euthyphro: An Analysis and Commentary, *Monist* 50, 369-82) に端を発し、この問題をめぐる大きな論争が研究者の間に生じており、ソクラテスにこの立場を帰する陣営とそうでない陣営に分かれて今なお論争が続いている。

本研究では、この問題に関する先行研究の調査の結果、従来の研究がいずれの陣営もほぼ共通して、一方でソクラテスの知の否認（知らないという発言や態度）との関連性を意識しつつも他方で（ギーチが論考中で示唆したとおりに）イデア論と切り離した形で問題の解明を模索していることがわかった。しかし研究代表者はそのような解明の方針に不備があると予想し、前期対話篇の「何であるか」の問いのうちには（『エウテュプロン』に顕著に見られるように）中期イデア論

の重要な契機がすでに含まれていることから、イデア論の生成をも視野に入れた形での解明を試みた。その結果、ソクラテスは上述のような立場をとっていると考えられるが、それは必ずしも哲学的探求を無効ないし不可能にするようなものではないという結論が得られた。知の否認はイデア論的思考とある意味で表裏一体的であり、むしろそれが探求を促す基盤となるのである。

以上の研究成果の公表は、『エウテュプロン』の注解・解説付き翻訳については、(別の対話篇と合本する形で) 京都大学学術出版会より平成27年度中に公刊予定であり、研究論考については、『真宗総合研究所研究紀要』32 (大谷大学、平成26年度中に発行予定) に投稿・掲載の予定である。

12月6日(金) 午後4時～6時

マルチメディア演習室(響流館3F)

○中国の国家の起源と発展についての研究の最新進展

王震中

○耶律和魯幹、耶律淳父子と遼東の政治 関樹東

②2014年3月3日(月)～3月6日(木)、福島重非常勤講師、今西智久任期制助教が、中国社会科学院歴史研究所を訪問し、研究発表を行った。

○関于奴児干永寧寺の設置和意義-以14～15世紀中国東北仏教史的究明為目標 福島重

○関于中国中古の沙門觀及沙門致拝君親-隋煬帝期の礼敬問題為主 今西智久

公開講演会の開催

京都大学人文科学研究所に訪問研究員として滞在中の朱玉麒氏(北京大学歴史学部及び中国古代史研究中心研究員)を講師として招聘し、本学博物館所蔵の大谷瑩誠蒐集「蒙古古石梵經硯」に関する公開講演会を開催した。

2月10日(月) 午後3時30分～5時30分

マルチメディア演習室(響流館3F)

○大谷大学博物館所蔵「蒙古古石梵經硯」を巡って

朱玉麒

〈ベトナム班〉

《研究会議・海外出張》

◇2014年3月6日(木)～3月10日(月)

織田顕祐(教授)・箕浦暁雄(准教授)が、ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院を訪問し、今後の共同研究の基本方針、方法論等について協議した。また滞在期間中、ビンギェム寺、ボーダー寺が所蔵する仏教文献の版木を視察した。その上で、版木に関する現在の調査状況、今後の保存方法、その資料的価値について、宗教研究院にて意見交換した。

《研究打ち合わせ》

◇2014年5月20日(火)

織田顕祐(教授)・箕浦暁雄(准教授)両名で、共同研究の基礎作業について具体的に検討し内容について確認した。

西藏文献研究

《公開講演会》

◇12月19日(木) 16時30分～(響流館3F演習室3)

ツルティム・テンジン師(ネパール テイテン・ノルブツェ僧院瞑想学堂堂長)

「ボン教聖地の現状について」

※前日の12月18日(木)16時30分～研究所内において講師を囲んで、ボン教の教義と歴史についての研究会を行った

◇3月7日(金) 16時～(響流館3Fマルチメディア演習室)

N. アムガラン師(モンゴル国ガンダン寺学術文化研究所)

「モンゴルの仏教文献：ガンダン寺所蔵チベット語文献の概要」

《研究会》

◇12月17日(火)17時30分～(真宗総合研究所ミーティングルーム)

寺本婉雅の日記『新旧年月事記』について

寺本婉雅の日記に関し、高本康子氏(嘱託研究員)作成の翻刻の確認および今後の作業についての検討

《研究打ち合わせ》

◇11月18日(月) 9時～(真宗総合研究所ミーティングルーム)

議題：研究業務の進捗状況の確認

◇12月17日(火) 16時30分～(真宗総合研究所ミーティングルーム)

議題：研究業務の進捗状況の確認

◇1月22日(木) 16時30分～(真宗総合研究所ミーティングルーム)

議題：研究業務の進捗状況の確認

◇3月4日(火) 13時30分～(真宗総合研究所ミーティングルーム)

議題：研究業務の進捗状況の確認と来年度研究業務について

◇4月8日(火) 16時30分～(真宗総合研究所ミーティングルーム)

議題：新年度の研究業務の確認

◇5月13日(火) 9時15分～(真宗総合研究所ミーティングルーム)

議題：研究業務の進捗状況の確認

《出張》

◇2014年3月12日(水)～3月14日(金)
出張者：清水洋平(嘱託研究員)
出張先：長崎県平戸市、長崎市
目的：松浦史料博物館所蔵のパーリ語写本並びに
是心寺、皓臺寺の研究調査

◇2014年3月16日(日)～3月22日(土)
出張者：清水洋平(嘱託研究員)
出張先：バンコク(タイ)
目的：ワット・ポー寺院所蔵の貝葉写本について
の共同研究調査

◇2014年4月25日(金)～5月2日(金)
出張者：松川節、武田和哉
出張先：モンゴル
目的：ヘンティ県とセレンゲ県におけるモンゴル
寺院の調査。

大谷大学史資料室

〈研究会参加〉

全国大学史資料協議会西日本部会2013年度第4回研究会
日程：2013年12月4日(水)
場所：エル・大阪(大阪府立労働センター)
参加者：松岡智美

全国大学史資料協議会西日本部会2014年度総会・第1回研究会
日程：2014年5月22日(木)
場所：大阪商業大学
参加者：藤田義孝・松岡智美

〈ミーティング〉

2013年11月22日(金) 11:00～12:45
出席者：藤田義孝・戸次顕彰・松岡智美
場所：真宗総合研究所
内容：大谷大学図書館における大学史スポット展
示の企画、大学史資料の今後の収集・保管
に関する意見交換、その他。

2014年2月25日(火) 14:00～15:45
出席者：藤田義孝・戸次顕彰・松岡智美
場所：真宗総合研究所
内容：大学史スポット展示の企画、大学史資料の
収集・保管に関する意見交換、公開講演会
開催の企画、その他。

2014年5月7日(水) 11:00～12:00

出席者：藤田義孝・松岡智美
場所：真宗総合研究所
内容：大学史スポット展示の企画、大学史資料の
収集・保管に関する意見交換、今後の活動
計画の確認、その他。

〈大谷大学史資料室スポット展示の作業〉

2013年12月17日(火) 11:00～12:00
「100年前の大谷大学」展の展示替え作業
参加者：藤田義孝・戸次顕彰・松岡智美
場所：大谷大学図書館入口展示スペース

2014年5月27日(火) 11:00～12:00

タイトル：「大谷大学」誕生
参加者：藤田義孝・戸次顕彰・松岡智美
場所：大谷大学図書館入口展示スペース
展示期間：2014年5月27日～7月上旬(予定)

〈その他〉

ハリス理化学館同志社ギャラリー開館記念式典への出席
日時：2013年11月29日(金)
場所：同志社大学神学館礼拝堂
出席者：戸次顕彰・松岡智美

大学史資料室2013年度公開講演会

「大谷大学史資料室の変遷と大学史関係史料の整理・保存について」
日時：2014年3月26日(水) 15:00～17:00
場所：真宗総合研究所ミーティングルーム
講師：大畑博嗣氏(元大谷大学真宗総合研究所研
究補助員)

上記活動以外にも、大谷大学史資料室では大学史資料
の調査・整理や、閲覧・質問等への対応を日常業務と
して行った。また、展示に際しては、大谷大学博物館
からの協力を得た。ここに謝意を記す。

■人事 (2014年4月1日付)

研究所長 (新) 松川 節 (旧) 浅見 直一郎

□特別研究員 (2014年4月1日付)

* 中井信介

現 職 任期制助教

研究期間：2014年4月1日～2017年3月31日 (新規)

研究課題：生業の域内多様度とその形成過程：東南
アジア大陸部におけるモン村落の事例比
較

* 黒澤祐介

現 職 本学非常勤講師

研究期間：2014年4月1日～2017年3月31日 (新規)

研究課題：保育カンファレンスが保育者の「同僚性」
に与える効果の縦断的追跡研究

* 鈴木達明

現 職 本学非常勤講師

研究期間：2014年4月1日～2017年3月31日 (新規)

研究課題：古代中国文献に関する表現形式に基づく
評価基準の構築

* 須藤孝也

身 分 日本学術振興会特別研究員 (PD)

研究期間：2014年4月1日～2017年3月31日 (新規)

研究課題：キルケゴールのキリスト教思想とデンマー
ク啓蒙：H. N. クラウセンとの比較を中心
に

研究所報 第64号

2014年6月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435